
いおん! LOVE!LOVE!LIVE!EXシナリオ-BULLET OF CRISIS-

伝説・改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ LOVE！LOVE！LIVE！EXシナリオ - B
ULLET OF CRISIS -

【Nコード】

N00450

【作者名】

伝説・改

【あらすじ】

軽音楽部のひとり、日暮遼祐。

彼がある日、目を覚ますとそこは牢屋だった。

その牢屋から何故か持っていた銃で脱出し、外へと出る。

しかしそこで遼祐が見たのは、崩壊している街だった……。

登場人物紹介（前書き）

今さらですが登場人物紹介を。

各オリキャラの詳しい詳細は偉大なる本家様をご覧ください。

なお、イメージＣＶの横に（仮）と書いてある物は作者が独断で考えたＣＶです。

原作の先生方は、ご意見がありましたら作者にご連絡していただけるとありがたいです。

登場人物紹介

名前：日暮 遼祐 ひぐらし りょうすけ

詳細：本作、及び『LOVE！LOVE！LIVE！』シリーズの主人公。詳しい詳細は本編の登場人物を記述している。

この物語では、目が覚めたらいつのまにか謎の施設の牢屋に入れられており、そこから脱出して桜が丘高校を拠点にしている唯率いる戦線に加わることとなる。

皆からは死んだと思われるしており、何故生きているのか自分でも分からない。

イメージCV：前野智昭

使用兵器：銀色の謎の拳銃

見た目はL・A・Rグリスリーのシルバータイプで、.44マグナム弾を使用する。

弾は無限にあり、また、様々な銃に変化する。

(変化する銃)

・SPAS 12 (ポンプアクション型)

・M4A1カービン (様々なアクセサリキットを任意で装着できる)

・バレットM82

・ベレッタM96FS

・S & W M500

等

名前：平沢唯

詳細：本作、及び『LOVE！LOVE！LIVE！』シリーズのヒロイン。

この物語では、崩壊した世界で怪物たちと戦う戦線のリーダーを務めている。

本編の天然な雰囲気はほとんど無くなっており、冷静な判断力や高い戦闘力を持つリーダーにふさわしい人間になっている。

CV：豊崎愛生

使用武器：二本の大剣

自分より大きい大剣。二本あり、片方は一回り小さい。

ちなみに外見のイメージは大きい方はDDFFでアナザークラウドが使用している剣。ファースト剣つて言うみたいです。

もう片方は、鬼武者に登場する炎龍剣。

名前：秋山澪

詳細：『けいおん！ Remembrance』などでのヒロイン。
この物語では唯の設立した戦線で崩壊した世界の中で戦い続けている。

本編での気弱な性格は改善している。

CV：日笠陽子

使用武器：S & W M29

俗に言うマグナムリボルバー。

澪はこれを二丁、両手に持って戦っている。

名前：田井中律

詳細：『けいおん！ BEAT！LOVE DRUM！』などで
のヒロイン。

この物語では澪と同じく、戦線で戦っている。

基本的に性格は変わっていないが、仲間想いな所が濃く出て

いる。

CV：佐藤聡美

使用武器：M1911 + サバイバルナイフ

まさかのスニーキング装備。

M1911はアメリカ軍で正式採用された拳銃でもある。

名前：琴吹紬

詳細：『桜が丘高等学校に舞い降りたひねくれ者』放課後アンバ
ルス』などでのヒロイン。

この物語では戦線に入隊して、オペレーターとしてサポート
している。

ふんわりとした性格が少々、尖っていたりする。

CV：寿美奈子

名前：中野梓

詳細：『けいおん！ Fragment』などでのヒロイン。

この物語では、澁たちと同じく戦線で戦い続けている。

性格は基本的に変わっていない。

CV：竹達彩菜

使用武器：M16A1、ベレッタM92F

三点バーストのアサルトライフルとしてよく登場するが、今回はフ
ルオート。

また、オプションとしてM203グレネードも装備する事も。

余談だが、これとベレッタM92Fはこの戦線の隊員の基本的な装
備である。

名前：真鍋和

詳細：『あなたの名を呼ぶ』などでのヒロイン。

この物語では戦線に参加しており、浩史たちと共に別行動を取っていた。主にサポートが仕事。

性格はあまり変わっていない。

CV：藤東知夏

名前：平沢憂

詳細：『けいおん！ Sincerely』などでのヒロイン。

この物語では戦線に参加しており、浩史たちと共に別行動を取っていた。和や紬と同じくサポートがメインの仕事。

性格はあまり変わっていない。

CV：米澤円

名前：鈴木純

詳細：『K・ON！！ NEXT EPISODE』などでのヒロイン。

この物語では戦線に参加しており、浩史たちと共に別行動を取っていた。

軽いノリな性格が少々控えられている。

CV：永田依子

使用武器：M16A1、ベレッタM92F

梓が使用しているものと同じ。

しかし、こちらはグレネードではなくマスターキー（ショットガン）を装備している事が多い。

名前：門村浩史

詳細：遼祐の親友。

この物語では、殺された（と思っている）遼祐の仇を取るために戦線に入隊し、和達と共に別行動を取っていた。

性格にあまり変わりはないが、少々、口数が少なくなっている。

イメージCV：下野紘

使用武器：デザートイーグル

バイオハザードアウトブレイクでマグナムハンドガンとして登場した銃。つまりマグナム。

名前：白銀準也

詳細：遼祐の後輩。

この物語では、殺された（と思っている）遼祐の仇を取るために戦線に入隊し、和達と共に別行動を取っていた。

性格は少々冷酷になっており、どんな奴でも敵ならば容赦しない。

イメージCV：吉野裕行

使用武器：ハンマー

イメージ通りのハンマー。

とても重いが、準也はこれを軽々と扱う。

【オリジナル主人公達】（登場順）

名前：春藤翔

詳細：『K・ON!! NEXT EPISODE』の主人公。

この物語では、崩壊する世界を救うため、戦線に入隊する。いつのまにか遼祐の後輩ポジションと言っある意味危険な位置にいる。

性格は変わっていない。

イメージCV：保志総一郎

使用武器：ベレッタM96FS

見た目はベレッタM92Fと同じだが、使用する弾丸が違っており、威力はこちらが上。

翔が独自に改造した銃でもある。

名前：灘宮英樹

詳細：『けいおん! Fragment』の主人公。

この物語では、『フリーデン』と名乗る組織に捕まり肉体改造され、魔法の様な力を使用する。

そして失われた人々の無念を晴らすため、唯の戦線に入隊する。

性格はあまり変わっていない。

イメージCV：石田彰

名前：瀬光紅凌

詳細：『桜が丘高等学校に舞い降りたひねくれ者』放課後アンバラスの主人公。

この物語では『守りたいもの』を守るため、特殊部隊へと入隊するが直後に隊長に裏切られ、『フリーデン』に肉体改造を受けた。

その『守りたいもの』を今度こそ守るために戦線へと入隊した。

性格はあまり変わっていないが、事件後の性格に準じているため、ツンデレが入っている。

イメージCV：櫻井孝宏

使用武器：UZI

サブマシンガン。

時にはこれを二丁使うこともある。

名前：反町龍二

詳細：『あなたの名を呼ぶ』の主人公。

この物語では翔と同じく、世界を救うために戦線に入隊した。過去になんらかの秘密を持っている。

性格は変わっていない。

イメージCV：浅沼晋太郎

使用武器：刀

時代劇などでよく見る日本刀。

龍二が使うのは特注で、絶対に曲がらない。

名前：戸上瞬

詳細：『けいおん！ Our Future』の主人公。

この物語では、怪物たちを作ったテロリストが支配する街の生存者で、戦線に情報提供していた。

性格は変わっていない。

イメージCV：浪川大輔（仮）

使用武器：SVDドラグノフ、H&K UMP

前者はスナイパーライフル、後者はサブマシンガン。

ドラグノフはよくゲームなどにも登場する有名なライフルでもある。

名前：カズマ・キサラギ

詳細：『魔法少女リリカルなのはStrikerS』青年と機動六課物語』の主人公。

この物語では並行世界にある時空管理局からやってきており、歴史に介入したため、戦線で戦うこととなる。

性格は変わっていない。

イメージCV：間島淳司（仮）

使用武器：インテリジェントデバイス『ブレイブハート』

剣&銃型のデバイス。

合体して、ガンブレード型としても使える。

名前：風星霧明

詳細：『けいおん！Remembrance』の主人公。

今作では、世界のどこかにいる姉と妹を探すために戦線へと入隊した。

性格は変わっていない。

イメージCV：緑川光

使用武器：薙刀

薙刀と言っても、ゲググとかが持つてる薙刀。
ちなみにビームじゃないので悪しからず。

名前：槇瞳黎兒

詳細：『けいおん！ 共に過ごした三年間』の主人公。

今作では、アメリカにたまたまいた霧明と共に戦線に入隊した。

性格は変わってない。

使用武器：P90

サブマシンガン。

ベルギーなどの軍で正式採用されている銃である。

名前：月神彰

詳細：『けいおん！if When The Moon's Reaching Out stars』の主人公。

今作では龍二と共に戦線へ入隊して、霧明と黎兒と行動を共にしていた。

性格は変わってない。

使用武器：刀

龍二と同じく日本刀。

形状もほとんど一緒だが、龍二は居合いで、彰は刀を抜いたまま戦う。

名前：黒崎雅（黒き勇者）

詳細：『けいおん！〜黒き過去を持つ少年の物語〜』の主人公。

今作では、ある人物をおうために、仲間と共に別世界（つか別次元）からやってきた。

性格は変わってない。

使用武器：双剣、二丁銃、伸縮自在の杖、魔術

もはやなんでもあり。

いっその事、彼らをラスボスにした方がいいか m (r y

Chapter 01 「崩壊・Crisis」 (前書き)

伝説

「EXシナリオ『未来への戦い』編です」

遼祐

「どついう話になるんだよこれ……」

伝説

「気にするな。俺は気にしない」

遼祐

「気にしないとだめだろうが……！」

Chapter 01 「崩壊・Crisis」

目覚めると、俺は暗闇の世界をさまよっていた。硬いコンクリートの感触。

……って待て。なんでコンクリートで寝てるんだ？俺は昨日、柔らかいベッドの上で寝たんだぞ。

それに……なんで暗いんだ？もう朝だろ？あ、今は夜中なのか。まあいいか。眠いからもうちよつと寝ようつと……

「……って寝れるかああああ！！！」

勢いよく飛び起き、辺りを見渡す。

……どこよここ。目の前に縦に並べられた鉄の棒がいくつも並べられていた。

つーことは……牢屋？いやいや待て待て。どうして牢屋にいるんだよ。よ。

さっきも言った通り、俺は昨日家に帰ってベッドで寝て

。「……あれ」

おかしい。昨日、俺は本当にベッドで寝たのか？

と言うか……。昨日より前の事が思い出せない。

いや、自分の名前は覚えてるぞ。日暮遼祐。で、本当の名前が天城和透。

桜が丘高校、3年2組で軽音楽部所属。

それで、それで……。

……思い出せない。さっきここで目を覚ます所までが。
記憶喪失……なのだろうか。

「落ち着け、とりあえずここがどこか確認しないと……」
しかし、俺なんで制服に着替えてんだ？
まあいいか。とにかくここはどこなんだよ。

柵から外を見渡すが、誰もいない。あるのは空っぽの牢屋がいくつも並んでいる光景だけ。

「……嘘だろ、おい」
誰もいないのか……？

どうやってこっから出るって言っただよ……。鍵なんてないし、尖ってるものもないし。

と、服に手を当て、腰辺りを探っているとズボンと服の間に何か大きな鉄の塊がある事に気づく。

なんだろうか。それを引きぬき、見ると……。

「んだよ……これ……？」

銀色の銃だった。

グリップは黒で色付けされており、見た目はどうやらL・A・R・G・リズリーの様だ。

確か……バイオハザード0でマグナムとして登場した銃だ。

でもなんでそんなものを俺が？持ってたっけ？

「とにかく弾は……」

残弾を確認するため、銃に装填されているマガジンを見る。

弾はあった。引き金を引けば撃てる状態だ。

でも……こんなもの、俺が撃てるのか？

ゆっくりと牢屋の扉の鍵に銃を向けて、トリガーに指をかける。

そして、トリガーを引く。

激しい音と共に、拳銃から小さな弾丸が飛び出し、鍵を貫く。

見事にその部分は破壊され、この牢屋から脱出できる状態だった。

「……なんで、撃てたんだ？」

反動がまずまったくなかった。

確かに少しはあったが、まったく気にならないレベルだ。
銃って反動があるんじゃないのか？

色々と気になる事があったが、とにかく俺は牢屋から出る事にした。
銃を構えながら、ゆっくりと先へ進んでいく。

辺りは暗かったが、腰のベルトに付けられていた懐中電灯で先を照らしながら歩いていた。

しかし、どうなってるんだ。

なんで俺がこんな銃とか懐中電灯を持ってんだ？他にもライターとかも持ってたし。

……もう、まんま イオだよな。雰囲気的にも。

でも、これは現実だ。夢でも幻でもない。

現に頬を引つ張っても、目が覚めなかった。

「……くそ」

何がどうなってるんだよ、おまけに……。

「この施設……なんだよ……？」

足元の、血まみれの死体を見ながら呟く。

本当なら吐いてしまうのだろうが、何故か気にならなかった。

どうしてだ。死体を見慣れてる？まさか……。

それにしても、この死体……まだ温かい。

さっき殺されたのだろうか。この施設でいったい何があったのだろうか。

おまけにこの傷。まるで、刃物か何かで切り裂かれた様な傷もあれば、銃痕に、燃やされた様な焼死体。

そして……噛みつかれたり、下半身だけ残されたりしている死体もあった。

「……流石に、下半身だけ残っていると気色悪いよな……」

気色悪いどころか、気持ち悪い。

だけど吐き気は無かった。

しばらく先を進んでいる、やがて『研究室』とプレートに書かれた

部屋にたどり着いた。

その扉の前に立つと、なんといきなり動き出した。まさか自動ドアだったとは。

中に入ると、部屋は電灯が点いたり消えたりしていてさらにまた倒れている多くの死体。

作業机がいくつも並べられていたが、とにかく散乱しており、机の上のパソコンの画面が割れていたり紙がバラバラになっていたり、酷いありさまだ。

やがて、奥にまた大きなドアが。その前に立ち、ゆっくりとそのドアが開かれた。

「……え」

そこは、街。

崩壊した、街そのものだった。

Chapter 01 「崩壊・Crisis」 (後書き)

伝説

「なんとという急展開」

遼祐

「お前がしたんだろうが。……で、ストック大丈夫なのか？」

伝説

「うん、とりあえず中盤ぐらいまでは書いてる。

今回はプロローグ的な話だから短いだけ」

遼祐

「……いいかげん本編進めろ」

伝説

「いや分かってるよ。

でも終盤辺りが……思いつかない……」

遼祐

「尺伸ばしの為かこのEXは。ちゃんと考えとけよ」

伝説

「うっせえ!!あと尺伸ばしじゃなくて20万&30万&500P
突破記念だ!!」

「けいおん!じゃ無くなってますが、『けいおん!LOVE!LO
VE!LIVE!』のおふざけ要素としてお楽しみくださいませ」

Chapter 02 「再会・Reunion」 (前書き)

伝説

「……残り12話！」

遼祐

「はあ！？6話じゃなかったの！？」

伝説

「いや、別小説として取り扱う訳だから少し話を長くしてもいいかなって。」

しかも6話じゃ急ぎすぎて話がよく分からなくなるし」

遼祐

「それで、今回はどんな話なんだ？」

伝説

「おまえが唯を泣かす話」

遼祐

「……ほえ？」

伝説

「今回、ゲスト……友情出演のキャラがひとり登場します。

さあ……果たしてだれでしょうか！？」

遼祐

「だれ？」

伝説

「CM?の後で」

遼祐

「……」

Chapter 02 「再会・Reunion」

この街には見覚えがあった。いや、知っていた。

ここは、俺が住んでいる街だ。

だけど……… ippたい、どうなってるんだ。

見た目はまんま、まさに戦争でもあったのかと言うほど、酷い事になっていた。

家は崩れ、ビルは倒壊。

煙や火が出ていたり、とにかく大変な事になっていた。

しかも、人もいなかった。

俺以外、人がいない。

「……… どうなってるんだよ、これ………」

ippたい何があったんだ。なんで、どうしてこうなった。

そして俺は、無意識にとある場所へ向かっていた。

その姿は、見えた。

「……… ここは、生きてるのか」

桜が丘高校。

ここは、健在していた。

校舎の中に入ると、俺はかなり驚いた。

一つは、床は空薬莖の山。

ここで銃撃戦でもあったのか？いや、あったのだろう。

現に、ここにも死体があった。でも、それは人間ではなかった。

未知の、とにかく気味の悪い怪物の様な死体があった。

こんなもの見た事ない。凶鑑とかにこんなもの載ってなかったし。

また、校舎の中はガラスの破片が散らばっていたり、ところどころ

床が崩れていたり、やはりここも崩れかけていた。

「……………何がどうなってんだ」

分からない事が多すぎる。

さっきの謎の施設。

街と学校のあり様。

……………とにかく、分からなかった。

やがて俺は、とある部屋の前に立ち止まる。『音楽準備室』と書か

れていた。

軽音部へようこそ！

誰か、いるかもしれない。

同じ軽音部の誰かが。

そう信じて、ゆっくりとドアノブへと手を伸ばし。

「動かないで」

カチャ、と銃の構える音が後ろでし、同時に女の声も聞こえた。

聞き覚えのある声だった。だけど、今動けば撃たれるかもしれない。

両手を上げて、はあ、と溜息をつく。

「……………桜高の、生徒？」

「……………ああ」

「所属クラブは？」

「……………軽音部」

「え……………？」

驚いたらしい。

俺はゆっくりと、後ろを振り向く。

「……………せ、先輩……………？」

「よお梓。どうした、物騒だなそんなもん持って」

自動小銃を構えている、梓がそこにいた。

部室の中には、俺と梓以外誰もいない。

あるのは、今では懐かしきテーブルとイス、そしてホワイトボードなど、本当に軽音部の部室そのものだった。

「……………先輩、どうして……………？」

どうしてって……………そりゃこっちが聞きてえよ。

微妙な表情をしている梓を見ながら、そういう。

「先輩……………もしかして、覚えてないんですか……………？」

「覚えてないって……………。まあ、さっき変な施設の牢屋で目が覚める前の事は覚えてないんだよ」

「変な施設……………？」

何か知っているのだろうか。

しかし今はどうでもいい。とりあえず、今の状況についてだ。

俺はそれが一番知りたい事だった。

「……………分かりました。お話します」

梓は重そうな口を開き、ゆっくりと状況説明した。

現在は2011年。つまり、俺はもう19歳と言う事になっているらしい。
始まりは2010年だった。日本のある場所で、奇妙な事件が発生した。

それは、鋭い爪の様なもので人が切り裂かれた事件。

その事件は様々な所で起きて、ついにこの街でも起きた。

やがて、また別の奇妙な事件も起きた。

電撃で人が焼死する事件や、氷漬けの死体が発見されたり。

そして……ついに悪夢は始まった。

突如として現れた、大量の奇妙な生物によって、日本、いや世界各国の人々が惨殺されていたのだ。

やがて世界の人口は、3分の1になり、この街も自分たち以外人がいるかどうか分からないらしい。

それから、戦いが始まった。

人々は武器を取り、生物と戦った。生き残るために。

「……って、待て待て。それで……とりあえず俺の事について教えてくれないか。それで、みんなはどこにいるんだよ」
そういうと梓は黙りこくった。

……まさか、もうみんな死んだなんて事、言わないでくれよ？
それとも、俺の事で何か思い出されたちゃいけない事でもあるのだろうか。

「……落ち着いて、聞いてください」
意を決したのか、その顔は何か吹っ切れた様な顔だった。
しかし、それでもどこか悲しみを残している。そんな感じだ。
俺はゆっくりと頷き、梓は口を開く。

「先輩は、死んでるんです」

……。
言葉を、失う。

何と言えればいいのかわからない。とりあえずどう会話を続行すればいいのだろうか。

それがわからなかった。

「どういう、事だよ……？」

「……先輩は、死んでるんです。1年前に」

1年前って言う……怪物が現れた？

「はい。その時、先輩は唯先輩をかばって……」

……嘘だろ、おい。

それを聞くと俺はただ肩の力が抜けて椅子にもたれかかってしまった。

じゃあ、ここに居る俺はなんなんだ。何者なんだ。

「……こっちが、聞きたいです……。でも……」

「でも？」

「先輩である事に、変わりないと思います」

梓……。

「先輩は、先輩としての記憶はありますし、私には先輩が他の誰かであるなんて思えないです」

「……まあ、そうだよな。俺も他の誰かであるなんて自覚、ねえしな」

「先輩……」

「とにかく、俺は生きてた。……その解釈で、いいだろ？その方が軽く思えるし」

「……相変わらず、なんですね」

「ほつとけ。それに、昨日まで高校生だった訳だし」
「そうですね」

梓は、自分の目から零れ落ちた涙を拭きながら笑う。

やっとこいつの笑う顔が見えた。こいつに真面目な顔なんて似合わないからな。

「なっ、そんなことないです!」

「……ま、そこはいいとして。で、あいつらはどこにいるんだ?」
本題に戻す。

おほんと咳払いした梓は、再び表情を先ほどのシリアスモードに戻す。

「澁先輩と律先輩とムギ先輩は、今街の外にいます」

「街の外?」

「……謎の生物を製造しているテロリストの基地を探してるんです」
あの謎の生物は、テロリストが作ったのか!?

「はい。……まだ、確証はないんですけど」

「確証は無くても、何か関係性はあるかもしれないのか」

「おそらく」

「……で、唯は?」

「……唯先輩は、街の中で生存者を捜しています」

「生存者って……この街にいるのか?」

「分かりません。だけど、捜す意味はあると思います」

まあ、そうだよな。

流石に二人じゃ、きついよな。

ここはやっぱり協力者を見つけた方が……。

「いえ、二人だけじゃありませんよ?」

「へ?」

と、驚いていると後ろでコンコンと言う音がした。

人間なのは分かっていたが、何故か俺は銃をドアの方へ向けていた。

「……なんでこんな反応を?」

「待つてください！私達の仲間です！」

と、俺を止めてドアの方へ走る。

そして、ゆっくりとドアを開けた。

「どうしたんだよ梓、いきなり大声あげて……」

なんだ、本当に人間じゃねえか。

見るとそいつは梓と同じぐらいの男で、右手には自動小銃を持っていた。

「って、この人は？」

「……えっと、日暮遼祐さん。私が軽音部の時の先輩」

おいおい、軽音部だった事実は既に過去の物となってるのか。

少し悲しくなりながら、俺に興味を持ったのは、ふーんと呟く男を見る。

「春藤翔って言います。生存者……なんですか？」

さて、どう答えればいいのか。

生き返りましたなんて事を言っても分かってくれそうにない。

まあ、その辺の事は黙っとくか。

「ああ。まあな」

「そうですね。じゃあ、この戦線に入るんですか？」

戦線？

最初に聞いて思いついたのはどこぞの死んだ世界戦線だった。

だがここは死んだ世界ではあるまい。……そう願いたい。

「戦線って、お前らもなのか？」

「ええ。……唯先輩が、創ったんです」

「唯が!？」

おいおい、まさか。

あのボケーっとしていた様な奴はだぞ？あいつが戦線？戦う？

……ありえねえ。でも、生存者をひとりで探していると言っている限り、戦えるのだろう。

「まあ、分かりましたよ。これからよろしくお願いします、日暮先輩」

なんか勝手に入ってる事になってるし。

しかし、この世界を生き抜くにはここで戦っていくしかないだろう。「遼祐でいいっての。……それで、お前は今まで何やってたんだ?」「学校内の警備をしました。ここは俺たち戦線の基地ですからね。奴らに襲われると大変ですから」

……と、梓が耳に付けていたイヤホンに手を当てていた。おいおい、まさか敵が攻め込んできたと言っなよ?

「いえ、唯先輩が帰ってくるみたいです」

「……そっか」

俺は、あんまり喜べなかった。

……果たして、あいつはどんな顔をするのだろうか。生きてるって聞いて、素直に喜ぶか?

それが一番いいんだけど、本当にそうかどうか。不安になってきた。

「もう学校に着いてるみたいなので、ここで待ってましよう」

「……あ、ああ」

どうすればいいのだろうか。

まあ、とりあえず会ってみよう。それしかない。

と、翔と梓の三人で部室で待っていると、やがて部室の扉が開いた。

「おかえりなさい、唯先輩」

「うん、ただいまあずにゃ」

予想通りの反応。

俺と目が合うとやっぱり見たままボーっとしていた。

この後の反応が気になるが、とりあえず俺は黙っておく。

……でも、出来なかった。

「……唯」

「あっ……! あっ……!!」

口に手を当て、声にならない音を口から出す。

そして……、唯が俺の所にゆっくりと歩み寄ってきた。

「……りょう、くん……?」

「……ああ」

「ほんと……に……?」

「ああ。そうだよ」

「……ッ!」

ドン、と俺の胸に顔をうずめた唯。

そこから嗚咽が漏れてきて、俺はその小さな体に手を回す。

「りょうくん……!りょうくんだよ……!」

こんな小さな体で、今まで戦って来たのか。

あんなに、弱かったのに。

今じゃあ……俺より強い……のか?

とにかく、俺はただ、唯との再会を、素直に分かち合った。

唯は、ただ声を出して泣いていた。

Chapter 02 「再会・Reunion」 (後書き)

伝説

「ほらね、泣かしたろ？」

遼祐

「……伝説、まずはお前を血祭りにあげてやる」

伝説

「へ？」

ポーピー……

デデー

遼祐

「……よし」

Chapter 03 「初陣・First Battle」 (前書き)

伝説

「超展開の嵐+チート遼祐の話です」

遼祐

「……これは、うん。酷い。そして再び友情出演キャラがひとり登場します」

伝説

「……初めに言っときます」

遼祐・伝説

「あんな設定ですいません」

OPテーマ『Red fraction』歌：MELL
アニメ「BLACK LAGOON」オープニングテーマ

「じゃあ、りょうくんはあの施設に……？」

翔は再び警備に戻り、俺と唯と梓の三人は部室の椅子に座って、これまでの事とこれからの事について話し合った。

生存者はいつもの様に、誰も見つからなかったらしい。

「ああ。あの施設の事、何か知らないか？」

「ううん、わたしたちも調べてただけど、まったく分からなくて」「でも、どうしてそこに人間の死体があるんでしょうか……？それに温かかったなんて……」

「この前行った時は誰もいなかったのに……」

「じゃあ、あそこに集団の生存者がいたとかは？」

あの死体は生存者って事も……。

「それは、きつと無いと思う。そんなたくさん生存者がいたら、わたしたちも気づけるはずだし……」

まあ、そうだろうな。

この戦線は、ほとんどは桜高の生徒、もしくはこの辺りの中学や高校の生徒、大学生で構成されている。

当然、大人もいるが主に動いているのは前まで学生だった奴らぐらいらしい。

大人は武器や情報を集めたりするぐらいらしい。まあ大人で動いている奴もいるが。

「どっちにしろ、あの施設は注意しないですね」

「うん。……それで、りっちゃんたちの事なんだけど……」

「ああ、テロリストのアジト……か」

ついさつき、連絡があつてどうやらアジトが発見されたらしい。

ただ、どうやら人数が今では少ないらしく、こちらから何人が来てほしいとのことだ。

そこで今、誰を送るかを考えていた。

と言つても、唯と梓は確定らしいが。

……俺は？

「遼祐先輩は……いいんですか？」

「いいんですかって？」

「戦うことにです。……多分、辛いと思います」

……辛い、か。

確かにそうかもしれない。実際戦ったわけじゃないけど、今の状態を見る限り、そう思える。

……だけど……。

「ここで、ただ指くわえて黙ってるのも嫌なんだよ。戦えるなら、

戦うよ」

「でも……りょうくんは……」

分かっていた。

唯は、当然反対だった。

そりゃそうだ。一回、俺が死んだのを目の前で見たんだから。

……だけど……そんなでも、俺は戦いたい。

どうして生き返ったか知らないが、それなら、その命を無駄にした

くはない。

むしろ、活用してやりたい。今度こそ、生きるために。

「……うん、分かった」

あまり納得はしてない様な感じだったが、唯は一応OKした。

梓も首を縦に振り、俺の入隊を歓迎……してくれた、と思う。

その後、早速俺たちは律達のいるキャンプ地へ向かうこととなった。着任早々転戦かよ。

色んな奴らが物資をトラックへ詰め込んでいるのを、俺はボーッと端っこで見つめていた。

それにしても、本当に若い奴しかいない。なんで大人は少ないんだろうか。確かにいるにはいるが。

……やはり……。

「おい」

と、突如として後ろから声がしたので腰に付けているさつきもらった銃のホルダーから銃を抜き取り、構えた。

……なんで、なんで銃を構えるんだよ。どうしてこう反応するのだろうか。

「あ……」

もちろん相手は人間。しかもこの戦線の人でさらに年上の様だ。銃をすぐにしまい、すいませんと謝罪の言葉を入れる。

「いや、構わない。むしろあれぐらいの警戒心を持つてた方がいいかもな」

「……警戒心ですか……」

そんなに警戒してないつもりなのだが。

……癖？まさか。そんな癖ないです。

「どうかしたか？」

「あ、いえ、なんでもない……です」

「そうか。ならいいんだが……。すまない、紹介が遅れたな。灘宮英樹だ」

日暮遼祐です、と自分の名前を言うと英樹さんが握手を求めてきたのでこっちも慌てて手を出し、握り合う。

「この戦線では、副リーダーを務めている」

「副リーダー……ですか」

まさかリーダーの唯に続き副リーダーにまで声をかけてもらえるとは。いや、リーダーとは元々仲良かったからだけど。

仲が良いって言うか……恋人同士だし。

「そう言えば、どうして急に戦線に？」

「ああ、いえ、その……」

「……いや、言えないならいいさ。ここはそんな奴らばかりだからな」

「って、言うത്？」

「怪物に友人、恋人、家族たちを殺されてその元凶を憎むもの……。そういう奴らがここで戦っている」

……まあ、リーダーも恋人殺されてるからな。しかも、目の前で。でも、俺は現にこうやって生きている。どうしてかは知らないが。

「じゃあ、英樹さんも？」

「……」

「あつ、すみません……立ち入ったこと聞いちゃって……」

「気にしないでくれ」

いや、気にしますよ。

そう言いたがったが流石に空気が読めない発言なので無理やり体の奥へ押し込んだ。

と、物資を運んでいた周りの隊員達が急にざわめき始めた。何かあったのだろうか。

目の前に、丁度翔が通ったので聞いてみる事にした。

「翔、何かあったのか？」

「奴らが校庭に現れたんです！」

「ちっ、こんな時に……。翔、唯や梓たちはどこだ!？」

「既に校庭で戦闘をしていると思います！」

そうか、と英樹さんは少し考えるそぶりをする。

「……遼祐、戦えるか？」
「だろうつと思った。」

「ええ、……なんとか」

「よし、翔といっしょに唯と梓たちの援護に向かってくれ。俺も後で向かう」

「「了解！」」

俺の初戦闘が、始まった。

翔と共に校庭に出ると、銃撃音の嵐。

機関銃の音や拳銃に、手榴弾の爆発音も響いた。

これが、戦場……。

こいつらは、これを今までやり続けてたのだろうか？

そして、何より驚いたのが、怪物だった。

「……なんだよ、あいつら……！？」

気味が悪い。死体しか見た事ないが、動いていると余計に気持ち悪かった。

濃い緑色のカエルのような形をしたものや、紫色の犬型の形をした奴など、とにかく気持ち悪かった。

さらに銃撃を浴びて、その体から噴き出す多大な紫色の血液……と、言っているのだろうか。それがますます不気味さを増していた。

「遼祐さん、行きましよう！」

拳銃 M92を持った翔がすぐさまその戦場へ飛び込む。

俺も腰から銃を引き抜き、後に続いた。

すぐそばにあった砂袋を積んだ腰ぐらゐまである壁に二人で飛び込み、残弾を確認する。

……そこで俺は奇妙な光景に直面する。

牢屋の鍵を撃った一発分が、既に補充されていたのだ。弾を入れた覚えは無いのに。

だが今はどうでもいい、やってやるだけだ。

「行きますよ……」

「……ああ」

壁から顔を出し、銃を構える。

すぐ近くにいたカエル型に照準を構え、引き金を引いた。

結果、命中。頭部から血が噴き出し、そのままぱたりと倒れた。

続いてすぐさま別の敵にロックを切り替える。同じカエル型で、ま

ったく同じように鋼の弾丸を撃ち込む。

それを何発か続け、そろそろ弾が尽きたと思った頃にある事に気がつく。

……銃弾が、尽きなかった。どうしてだ……？

一旦しゃがみ、マガジンを手に取る。しかし銃弾は尽きていなかった。

まさか、無限バンダナでも付けている？おかしい。

実は2週目？ゲームの世界じゃあるまいし。

いったい、この銃はなんなんだ？反動と言い、残弾と言い……。

「くそっ！」

訳が分からず、とにかく敵に撃つ。

やがて、翔が唯達の所に向かうと言ったので俺は言う事を聞き、その場から移動する。

その途中も、怪物たちの猛攻は続いた。この数は、流石に拳銃だけじゃきつかった。

と、思った時だった。

2体ほどのカエルが同時に襲いかかってきた。翔は弾切れで、俺は反応が少し遅れた。

完全に、死を覚悟した。

「伏せろ!!」

突如として、炎を纏った少し大きめの球体が2体の怪物を襲った。そのまま爆発し、2体は地面に墜落し炎上していた。

「……………あれって」
間違いない。

魔法だった。

それが飛んできた方を確認する。校舎の屋上からのはずだ。見ると、そこには英樹さんが立っていた。まさか、さっきの魔法は

……………。

『大丈夫か、二人とも!?!』

イヤホンから、英樹さんの声が伝わってきた。

「はい、なんとか!」

『油断するな!敵はまだ後方にたくさんいる!』

その前に、その魔法について教えてください。

しかし今はそんな事を言っている場合ではなかった。

翔と共に再び唯たちのいる正門に向かう。そこから敵はなだれ込んでくるらしい。

「唯さん！梓！」

二人は背中合わせに、非常にスタイリッシュに戦っていた。
梓はM16A1を撃ち続け、唯は

「……剣！？」

巨大な大剣を二刀流で敵をバツサバツサと斬り裂いていた。

……もうなんか昔のイメージからしてギャップが激しすぎなんだが、
とりあえず俺は周りの敵を撃ちながら二人の元へ翔と共に近づく。

「唯！梓！」

二人はこっちに顔を向けた。

敵はとりあえずいなくなつたが、次の増援はすでにこっちに向かっ
ているだろう。

「二人とも、大丈夫か？」

「ええ、なんとか」

「うん。大丈夫だよ」

まあ、そうだろうな。

梓と翔はマガジンを換え、装填を完了させると同時に唯が口を開く。

「次の増援で、とりあえずあいつらはいなくなると思う。もう少し
だから頑張ろう」

「分かった」

そして、俺たちは横に並んで近づいてくる敵を迎え撃つ準備をする。
既に奴らは目視できるほど近くにいた。しかも、結構な数だ。

だが、俺たちならなんとかやれるだろう。他の隊員もそろそろこっ
ちにくるだろうし。

「……行くよ！」

唯の合図で、俺たちは一斉に攻撃を開始した。

梓と翔の正確な射撃で、次々と敵は倒れていき、唯の華麗な剣さば
きで怪物たちは斬り刻まれていった。

俺も唯に近づこうとする怪物を撃ち続けていた。このままやってい
れば敵の全滅は時間の問題だろ。

薬の投薬量を増やそう。

この銃を持たせておけばあとは何とかなる。

「ぐっ……!!」

激しい頭痛と共に、何か吐き気がこみ上げてきた。

これは、前の世界でもあった記憶遡行と少し似ていたが、ここまで激しいものではなかった。

たまにこれぐらいのがあったが、ここまで苦しくなる事は無かったのに……。

「先輩、どうしたんですか!？」

「……な、なんでもない……撃たないと死ぬぞ!」

我慢して、撃ち続ける。

こいつは我らが作った中で傑作だ!

「くそ……ッ!」

様々な局面に対応できる、最高の銃だ。

と、ここで、『何か』『頭の中に傾れ来るような気がした。この、銃の本当の扱い方が、分かったような。そんな気が。』

「……………」

イメージする。銃を。

撃ち続けながら、なんでもいいから知っている銃を頭の中で想像した。

そして…………。

「な、なんだ!?!」

「何、これ…………!?!」

銃が突如として、白い光を発する。

それと同時に、その光がやがて形状を変化させていった。

その光はおさまり、俺が手にしていたのは、スパス12 ショットガンだった。

「……………」

当然、ショットガンは近距離での戦闘の方が圧倒的に有利。

俺は唯の元へ近づき、再び唯に襲いかかろうとしたカエル型に向けて、弾を発射する。

銃の先から飛び出したいくつもの弾は、全てカエル型に命中。倒れ

こむ。

ショットガンは、拳銃やマシンガンなどと違い、変わった弾丸を遣う事が出来る。

それがこの『散弾』だ。

一つの弾の中に、さらに小さな弾丸がいくつも入っており、発射するとそれがバラバラに飛び散り、目の前の対象に当たる。

殺傷能力は非常に高いのだが、性質上、遠距離での発射は効果が薄くなる。

「りょうくん、それって……？」

唯が俺の銃を見て、驚く。

そりゃそうだ。拳銃が突如として散弾銃に変化したのだから。

「……とにかく、今はこいつらを倒すぞ！」

装弾チューブの外側にあるスライドを前後させ、銃の中に入っている空薬莖を外へと吐きだす。

これが、ポンプアクションだ。

「うん、分かった」

再び戦闘を続行させる。

やがて、校庭には多数の怪物の死体でいっぱいとなっていた。

英樹さんが運転する運転席の助手席から、俺は崩壊した街を窓から見る。

既にそこは過去の面影は無かった。ただ崩壊したビルや家が残るだけだった。

あの戦闘の後、すぐに律達のところへ向かう隊員は車に乗り込み出発した。当然、俺も。

トラックは2台あり、一台は武器や機械などを乗せた、つまり今俺たちが乗っているトラックだ。

2台目は隊員を乗せたトラックでそれは翔が運転していた。

「……………なあ、お前、その銃……………」
またか。この質問を何度されたらろうか。

戦闘が終わって、唯たちに問い詰められた。この銃はなんなのかを。弾が無限にあり、さらに拳銃から散弾銃に変化する魔法の様な銃など存在するわけがない。

……………しかし、俺からすれば英樹さんが使っている魔法の方が不思議でしようがなかった。

俺はこの銃についてよく分からなかった。当たり前だ。覚えてないのだから。

ただ、それについての記憶が傾れ込んできただけ。それを言つと、信用はしてくれた。

そして俺は、英樹さんのあの魔法に着いて聞いた。

あれは、英樹さんの過去に秘密があった。

化け物が現れ始めた後、とある謎の組織が現れた。名を『フリーデン』と言う。

そのフリーデンは、現れた怪物の生態を調べると言う活動を行っていた。

「……………その怪物の生態を調べるうちに、ある事実が発覚した」

「事実……………」

怪物たちは、未知の細胞によって出来ていると言うこと。

人類が今までに発見した事が無い細胞だった。しかし、それは人工。その細胞は、人間に取り付ける事によって様々な異変が起こる危険な細胞だった。

異変の基本的異変は、俺たちが戦っている怪物。つまり、あれは人間だった。

自らの意思をコントロールすることができなくなり、異物と化する異変。

だが、時にまったく違う異変が起こる事があった。最初の例が、英樹さんの、あの力だ。

「でも、なんで英樹さんがその細胞を……？」

「……奴らに、捕まったんだ」

フリーデンにか。

どうやら、奴らは人体実験で英樹さんを利用し、その細胞を取り付けた様だ。

その結果、このような異例の事態が起きた。自我を保ったままかつ、人間離れた能力を。

「じゃあ、魔法ってわけじゃないんですか」

「魔法とまではいかないが……みんなからすれば、そう言われてもしょうがないだろうな」

まったく……。どうなってるんだ。

あの、銃といい英樹さんの力といい、今の世界の状態といい。それに、あの記憶。

分からない事が多かった。

俺はただ、街の外に広がる荒野を見つめながら、この分からない事態に静かに困惑していた。

Chapter 03 「初陣・First Battle」 (後書き)

伝説

「改めて言います」

伝説・遼祐

「あんな設定でスイマセン」

遼祐

「どうしてあんな設定にした!？」

伝説

「いやその……お遊び？」

遼祐

「……なんも言えねえ」

EDテーマ『菩提樹』歌：天野月子

CDアルバム「Sharon Stones」収録

Chapter 04 「決意・Decision」 (前書き)

伝説

「これを真のグダグダと言います。話がまったく進んでいません」

遼祐

「アホか」

伝説

「だってこの話は後々の話につながるんだよ」

遼祐

「……ああそっすか」

伝説

「さて、今回は二人の友情出演者が初登場します」

遼祐

「今ここで言え！」

伝説

「楽しみは最後まで取っておくもんだよ」

遼祐

「そっだね」 (棒読み)

オープニングテーマ『楽園のメタファー』歌：片霧烈火

PCゲーム『BALDRSKY DiveX DreamWorld

d』OPテーマ

Chapter 04 「決意 - Decision -」

やがて見えたのは、いくつものテントだった。

そのすぐそばにトラックを止め、英樹さんと共に降りる。

同じく唯たちもトラックから降り、『何故か』武器を構えていた。

「おい何やってんだ。ここに律達がいるんだろ？」

そう、いるはずなので武器など構える必要は……無いはずだった。しかし、俺はすぐに理解した。この世界に安息の地など無い事に。ここも既にやられている可能性もあったから。

……でも、その心配はひとまずは無用だったらしい。

「あつ、りつちゃん！」

テントから現れたのはナイフを持った律と、銃を持った澪だった。

「唯たち……か」

それぞれ銃とナイフをしまつと、俺と二人の目があった。

「え……？」

「遼祐……なのか……？」

またこの反応か。そりゃそうだろうが。

二人の元に近づき、頭に手を置く。

「どうみても俺だろうが。こんなイケメンどこにもいないだろ」

「……遼祐、だな……」

なんだよその絶望感を味わってるような顔は。律さん。

「でも……なんで？」

つて言うか、溼驚かないんだ。

てつきり幽霊だ！とか言うのかと。

「こんな状況だからな。ビビってられないよ」

「でも驚いたよ。……なんで、生きてるんだ？」

生きてたちゃだめか。

「いや、嬉しいよ。ホントに」

「……そっか。ならよろしい。……そうだ、紬は？」

「テントの中にいるよ。ムギはオペレーターだからな」

あいつらしいポジションだ。

苦笑いしながら、軽音部全員が再会した喜びをかみしめた。

紬は泣いて喜んでた。

まあ、そうだろうな。俺はその頭を撫でて微笑んだ。

さて、再会を楽しむのはここまで。ここからはスイッチを切り替えなければならぬ。

「りっちゃん、現状報告を」

おいおい、ホントに戦線だよ。唯が余計に戦線のリーダーに見えてしまった。まあ事実なんだけど。

テントの中にある長テーブルに、唯、律、溼、紬、梓が座り、反対側に俺と英樹さん、そして髪が長い俺と歳があんま変わらなそうな奴の8人。

唯からの指名を受けると、律が立ちあがりバインダーの様なものを手に持つ。

「こっから先に行ったところに小さな廃市街地があるんだけど、そこにいる生存者からの情報でそこに奴らのアジトがあるらしいぜ。その街の小さなビルの地下にあるみたいだ」
なるほどな。

確かにそこなら隠れるのには絶好だろうな。しかも地下だし。

「じゃあ、出発は明日の明朝。それまで、みんなは体を休めたり武器の点検をしてね」

短いブリーフィングが終了した。

詳しい決めごとは明日の作戦決行の1時間前に説明するみたいだ。それぞれテントから出て、ようやく自由行動となった。

と、ここで後から出てきた英樹さんをつまえる。

「どうした？」

「ブリーフィングの時にいたあの髪長い奴誰なんですか？」

そいつは既にテントから出てどこかへ行ってた。

「ああ、凌の事か。瀬光紅凌と言ってな、怪物が現れて設立した特殊部隊の生き残りだ」

「特殊部隊……？」

あんな若いのに？俺といっしょぐらいだったけど。

「さあな、その辺りはよく分からない。本人に聞いてみればいいんじゃないか？」

「聞くつて……あいつ見たまんまやばそうな雰囲気か全開で……」
そう、殺気と言つか、とにかくやばそうなオーラを放出しまくっていた。

だからつい話しかけようとしても話しかけれなかった。

「大丈夫だ。俺は普通に話しかけるぞ」

そりゃアンタは昔からいたからでしょうに。

とりあえず、まずは瀬光紅を探す事にした。

「あ、翔。瀬光紅見なかつたか？」

外の警備をしていた翔をたまたま見かけたので声をかけることに。

「ああ、瀬光紅さんなら、多分少しこのキャップから離れてるところにいると思いますよ」

「そっか。ありがとな」

「つたく、そんなとこにいるからますます嫌なイメージが固まっちゃった。」

不安になりながらも、瀬光紅の所へ向かう。

そして、いた。

テントに寄りかかりながら、銃の手入れをしていた。

小型の自動小銃。つまりサブマシンガン　　UZIだった。

「よ、なにやってんだ？」

「うつせえ、さつさと消える。めんどくせえ」

「……ごあいさつだな。」

「って言うか何がだよ。どうめんどくさいんだ。」

「そういうところだ。さつさと消えるつってんだらうが」

とか言うお前もめんどくせえよ。

「そっかいいたがったが、面倒になりそうだったのでやめておく。」

「……お前、特殊部隊の生き残りだつて？」

「誰から聞いたんだよ」

「英樹さんから。灘宮英樹。副リーダー」

「そこまで言わなくても英樹さんつて言えば分かる。……ああ、だからなんだよ」

「会話を成立する事が出来た。」

「って、なんで俺はこいつと話をしたがつてんだ。第一男だらうが。」

「この戦線にはいつからいるんだよ？」

「2ヶ月前に入った。もういいだろ。消えるつて言つてんだらうが」
ちっ、いちいちムカつく野郎だ……。

と、俺はある事に気がついた。瀬光紅は右腕だけ腕をまくつていな

かった。左はまくってるのに。
気になって、俺は聞く事にした。

「なあ、なんで右腕だけ腕まくってな
鼻先に何か突き付けられた。」

どう見ても、瀬光紅の銃だった。やべ、触れちゃダメだったのか……？

「黙ってる。次喋ったら殺すぞ」

どうしてそこまでして話したくないんだよ。

諦めて、俺はその場から退散する事に。それにしても、感じの悪い奴だ。

俺は唯から、ここにあった廃高台から見張りをしてくれと頼まれた。もちろん新人である俺が断る様な生意気な事は出来ない。大人しく従うことにした。

ホントは、唯と少し話したかったのだが、またあとでいいだろう。高台の一番上までのぼると、そこに既に誰かがいた。ああ、こいつと交代しろって事なのか。

「ああ、そのアンタ」

「え、僕ですか？」

……一つ思った。なんでこの男勢はほとんどの確率でイケメンなのだろうか。

そこにいたのはやはりイケメンだった。翔と言い、英樹といい、瀬光紅……もイケメンの部類だろうな。性格が良ければモテたものを……。

「唯 平沢隊長から言われて、俺がここ見張っとくからお前は休憩していいぞ」

「いえ、僕もしますよ。僕の本職なんで
まあ、いいならいいけど……。それにしても、なんで俺が来たらさつきくすって笑ったんだろうか。」

青年の横に立ち、高台から見る景色は、そこまでいいものではない。

街の外は、ほとんど砂漠だった。怪物たちが現れた影響らしい。ほとんどが砂に覆われており、何がどこにあるのかまったくわからなかった。

「……お前、名前は？」

「反町龍二って言います。あなたは？」

「俺は日暮遼祐。……もしかして、同い年？」

「19歳だよ」

「じゃあ同じ年か。敬語使わなくていいぞ。あと呼ぶ時も下でいい。

「じゃあ……遼祐？」

「ん。お前、律達についてきてここでずっと？」

「いや、僕は元々この高台で暮らしてたんだ。あの怪物たちが現れるから」

「そっか。」

「じゃあ律達が現れて、この戦線に？」

「そんなところ。遼祐は、唯といっしょに来てたよね？」

「なんだ唯と仲良かったのか」

「まあね。って言うか、基本的にみんな唯とか唯ちゃんとか呼んでるから。さつき遼祐が言った平沢隊長って呼ぶ人はほとんどいないよ」

「だからさつき笑ったのかお前。」

「ごめんね」

「まあいいけどよ。……それより……」

俺は龍二の腰に刺してある刀を見る。

ナイフとかなら分かるが、今の時代に刀か。

「剣道やってたから、それなりに使えるつもりだよ」

ああ、そう。

でも刀って使つてると刃こぼれしないか？

「大丈夫。僕のは特注だし」

「なら安心だな。……ん？」

と、バリバリと言う音が耳に入る。

空からだった。だがこの音は確か……。
上を見上げると、そこには案の定、ヘリコプターが飛んでいた。しかも武装付きの。

「……『リーチ』のヘリだね」

「『リーチ』？」

「うん、怪物たちを捕まえて『フリーデン』にお金や武器などを引き換えに渡す、武装集団の事だよ」

「じゃあ、そいつらを通して、フリーデンは怪物の研究を？」

「そう。リーチもフリーデンも、ホントに許せない奴らだよ……」
手を握りしめて、震えてるのが見えた。

何か、よっぱどの訳があるのだろうか……？

これ以上聞くのは気が引けたため、聞かない事にした。
すると、再び音がする。今度はトラックだった。

敵かと思い、拳銃を手にとってライフルを出そうかと思ったが、龍二にそれを止められた。

「大丈夫だよ。味方だから」

「……ああ、そうっすか」

なんか、哀れな気分になった。

「……そっか、なにはともあれ、無事でよかったよ」

トラックに乗ってたのは浩史、白銀、憂ちゃん、純ちゃん、和だった。

これで知ってる奴らは集合した訳だ。

「……ああ、心配かけて悪かったな」

「いいよ。……本当に、生きてて良かった……」

浩史の肩に手を置いて安心させる。

「ホント、よかったわ」

「はい、無事で何よりです」

「うん、そうですね」

和も憂ちゃんも純ちゃんも俺が生きてる事を素直に喜んでくれた。

さてと、で残るは……。

「……日暮さん」

「んだよ」

「ご無事でなによりですううう!!」

かかと落としを食らわせ、黙らせた。

危ない危ない。危うくこいつに抱きつかれるところだった。

「何するんすか!?!」

「黙らっしゃい!あのまま抱きつかれたら色んな意味で終わってたよッー!!」

「どういう意味っすか!?!言っときますけど、俺はホモじゃないですからね!?!」

だげど行動そのものはどう見てもホモだろうが。

溜息をつき、浩史に視線を戻す。

「で、何やってたんだ?」

「アジトがある廃市街地に行ってたんだ。生存者と物資を探してたんだ」

「まあ、あつたのは銃や弾丸、食料ぐらいだけどね。生存者は、あそこから動きたくないみたい」

メガネを上げながらそういう和の言葉にふーんと返すと、唯が現れて、

「じゃあ、みんなはゆっくり休んで。あつ、白銀くん。翔くんに

高台の見張りをお願いって伝えて」

「分かりましたっす」

そういうと、白銀は翔の所へ向かった。

……そう言えばあの二人、なんとなくポジション的に似てるよな。どうでもいいか。で、俺はどうすんの?

「りょうくんは、休んでていいよ。……あ、ちょっと話があるからいい?」

「え、ああ……いいけど」
よかった、ようやく唯と話す事が出来た。
俺と唯は、唯専用のテントへ向かった。

中に入ると、そこにある小さな机の上には置いてある銃や弾丸、そして飲みかけの……コーヒーが入ったカップと鉄のポットが乱雑にのせてあった。

床にはキャンプで使われる寝袋がある。以上。それだけだった。

それにしても、まさか唯がコーヒーを飲むとは……。どんだけ進歩してるんだこの唯は。変わりすぎだろ。

1年って、人を変えるのに十分な年数だなとつくづく実感させられる。

「そんで、話って?」

「……うん」

背中を向けたまま、頷いただけ。

やがてこっちに振り向くと、口を開いた。

「……りょうくん」

「ん?」

次の瞬間、唯が飛びついて来た。

と思いきや、今度は俺の唇が唯の唇で塞がれた。

「ん……!?!」

しかも、その唇の間から唯の舌が進入する。

いわゆる、大人のキスだった。俺はそのキスを、半ば強制的に受け入れた。

何分か経つと、ゆっくりと互いの唇は離れる。

「……どうしたんだよ、急に」

「……ごめんね。その……我慢、出来なかったから……」

ああ、そっか。

1年も会ってなかったんだ。そんな感情になっても仕方ないだろう。俺はゆっくりと唯を抱きしめた。

「悪かったな、心配かけて」

「ううん、いいよ……りょうくんが生きて嬉しかった……」
頭を優しく撫でる。

顔を見合わせると、唯が泣いてるのが分かった。

本当にうれしかったのだろうか。……当然、だよな。

「……りょうくん……」

「ん？」

「もう……いなくならないでね……？」

……うん、って言い返せない。

多分、戦い始める前の俺だったら、即答していた。

けど……戦い始めて、梓が言った通り『戦い』と言うものがどれほど辛いものか分かった。

だから、下手をすると明日死ぬかもしれないし、仮に生きててもまた別の戦いで死ぬかもしれない。

……だけ。

「……分かってる。ずっとお前という」

叶わないかもしれない願い。

『ずっと』なんて、ない。だけど、それでも俺は唯を安心させるためにそう口にした。

だから、口にした以上、死ぬわけにはいかない。抗い続けてやる。

必ず。

Chapter 04 「決意・Decision」 (後書き)

次回予告

遼祐「突撃イイイ!!」

唯「りょうくと翔くと龍くの三人はビルへの突破口を開いて
」!

英樹「そこか!」

律「りょうかーい!」

紬「右後方から、巨大な熱源反応!こちらに接近してきます!」

凌「いいからさっさと行け!構うな!」

龍「間違いない……こいつら、強いよ」

カズマ「しょうがねえ……やってやるよッ!」

NEXT Chapter 05 「交錯・Cross Drive」

『教えて！遼八先生！』

遼八

「えー、ペンネーム『某エロティック大統領の息子の娘のいとこの孫のはとこのお兄ちゃん』さんからの質問。

【こんにちは。LLLでの遼祐くんのかっこよさに惹かれ、今では男なのに遼祐を夫に迎えたいと思ってしまうほどです。

さて、原作のアニメではOPとEDに唯たちも登場しますが、遼祐がもしアニメに出ていたらどの辺に出てきますか？くだらないかもしれませんがご回答お願いします】

はい、ズバリお答えします。

最初に、1期のOPでは、紬の後に遼祐の紹介がやってきて、その後梓に入ります。また、演奏しているシーンでは、唯と梓の間でちやかちやか弾いています。

一方、EDでは黒のタキシードを着崩して、演奏に参加しています。髪型が本編以上にボサボサになっています。

2期OP1では

浩史

「長いッ!!!」

F20C先生、誠に申し訳ございません……。

「じゃあ、作戦内容を説明するね」

陽はまだ上がっていない。冷たい風が砂ほこりと共に体に当たる。唯がここにいる隊員の前に立って、今回の作戦の説明を始めた。俺はその横に、英樹さんと翔と共に立っている。

「英樹くん、浩史くん、白銀くんはビル後方から、凌くんと遷ちや

ん、りつちゃんはビルの右側から、

りょうくと翔くと龍くんは前方からビルへ侵入。それぞれの進路を確保したと同時に、隊員のみんなでアジトへ潜入します」つまり、俺と翔と龍二は真つ向から突つ込むのか。

ビルの周り……と言うか、あの周りには既に数多くの怪物が徘徊しているらしい。

これぐらいの人数で行かなければ、確実に返り討ちに遭うだろう。

「……そして、アジトに進入し、そこにいるテロリストグループを捕まえる。……今回の、作戦は以上です。何か質問はありますか？沈黙と言う二文字が空間を支配する。質問は無い様だ。

「……みんな、今までにない大規模な作戦だけど、絶対に諦めないで」

そついうと隊員たちが声を上げる。

それと同時に、陽も上がった。

全員トラックに乗り込み、決戦の場所へと向かった。

やがて、現地に到着する。

俺と翔、そして龍二が地に降りる。それと同時に唯から連絡が入る。

『りょうくん、翔くん、龍くん聞こえる？』

「ああ、どうした？」

『ビルに到着したら、翔くんが持つてる信号弾を撃つて。そうすればわたしと隊のみんなが向かうから。それまで、三人は待機しててね』

待機……？そんな事するんなら三人で先に……。

『ダメ。危険すぎるよ』

「……分かった。オーバー」

通信が終わると、拳銃を取り出し、M4カービン　アサルトライフルへと切り替える。

オプションにM26 MASSアンダーマウントショットガン、ライト、レーザーサイトを取り付けた。ここまで便利だとは思わんかつ

た。

翔もM92、龍二は刀を取り出し、戦闘準備は完了していた。

「……行くぞ。翔、龍二」

「はい」

「……分かった」

「突撃イイイ!!!」

同時に駆け出し、化け物どもがうじゃうじゃいるビルまでの道に呐喊した。

必ず、奴らを倒してやる……!

確実に、確実に頭を狙い撃つ。

レーザーサイトを当て、カエル型と犬型の頭を狙った。弾は無限なので関係ないかもしれないが、これなら確実だ。

龍二も敵を斬り裂き、翔は確実な射撃能力で次々と蹴散らして行った。

これなら、ビルへの入口へ行けるのは時間の問題だろう。

ショットガンを放ち、固まっている怪物どもを吹き飛ばし、一体は鉄の柱へ叩きつけられ、緑色の血を口から噴き出しながら砂の地面に倒れる。

「遼祐!」

背後に敵が飛び込んできた気配。それと同時に龍二の声が響く。

俺は瞬時に回し蹴りを食らわせて俺に飛び込もうとせんカエル型をふっ飛ばし、空中にいる状態のまま狙いを定め、フルオートで弾丸を発射する。

体のあちこちに風穴を開け、砂の上に落ちる。

やがて、怪物たちの声が辺りから消える。全部倒したわけではない

が、このエリアの敵は全滅したのだろう。

「それにしても、遼祐、運動神経すごいみたいだね」

「え、ああ……体が勝手に動いたって言うか」

まるで、ああいった経験が豊富。まさにその通りの様な動きだった。まったく戦った事が無いのに……。天性なのだろうか？

「あと200メートルでビルです。急ぎましょう」

翔を先頭に、俺と龍二は再び走り始めた。

と、その直後だった。

「うわっ！」

突如として、乾いた銃弾の音が聞こえ、それと同時に翔の足もとに弾丸が高速で落ちてきて、砂に叩きつけられた。

物陰に隠れて、辺りを見回す。

「敵……？」

俺たちを狙っているのなら、そうなのかもしれない。

ゆっくりと辺りを見ると、やがて小さなビルの屋上に人影が。

「あいつだ！」

龍二が指さすと、俺はすぐさま銃を構え、物陰から出る。

「生存者か!？」

叫ぶと、その男は構えていた銃を降ろし、やがてビルから出てきた。

「ごめん……。怪物かと思って……」

「こんな状況だからしょうがないよ。名前は？生存者？」

「戸上瞬。ここの生存者だ」

SVDドラグノフ　スナイパーライフルを背中にしまうと、瞬は自己紹介してきた。

「俺は日暮遼祐。こっちは反町龍二に春藤翔。あそこのビルの地下にある」

作戦内容を説明してやるうかと思ったら、翔がいきなり口をふさいできた。

「(てめ!何しやがる!!)」

塞いでいた口を無理やり離し、小声で翔に聞く。

「（何言ってるんですか！生存者って言っても、あいつらの仲間の可能性だって……）」

「（仮にそうだとしたら、なんでこんな所にいるんだよ！？）」

「（だけど……）」

「大丈夫だよ、僕はいつらの味方じゃねえから。むしろ、敵だし」と、聞いていたのか、瞬がいきなり話に乱入してきた。

驚いたので、俺たちは顔を見合わせた。

「あ、もしかして僕たちの戦線に情報を提供した生存者って……」

「ああ、僕だよ」

なんだ……そうならそうと早く言えちゅーに。

「ごめん、最近、この辺りに武装集団がよくうろつくようになったから」

もしかして、昨日言った『リーチ』なのだろうか？

確かに昨日こっちの方面にヘリが向かってたし……。

「いや、あいつらは用件を済ませたらさっさと帰るはずだから、それは無いと思うよ」

……龍二の言葉に、何か違和感を抱く。

何かは分からないが、なんだろう……。

しかし今はそれどころではない。俺はそれをさておき、再び瞬の方に向く。

「とにかく、この辺は危険だから、すぐにどっかに逃げた方がいいぞ」

「いや……僕も戦わせてくれ」

「いいのか？大変だぞ」

「大丈夫。銃の扱いだって慣れてるし、こんな所でボーっと指をくわえてみてるわけにもいかねえから」

もちろん、仲間になりたいなら歓迎してやりたいが、唯に聞かないとな。

すぐに唯に　いや、紬につなげた方がいいだろう。確か唯はそこで指示を出しているはずだ。

周波数を合わせて、やがて繋がった。

「細、聞こえるか？唯に代わってくれ」

『うん、分かった』

しばらく間をおくと、唯の声が聞こえてきた。

『どうしたの、りょうくん？』

「唯、俺たちに情報を提供した生存者が作戦に参加したいって言うてるんだ。俺たちはいいんだけど、お前にも聞いといた方がいいかと思っとな」

『その生存者の名前は？』

「戸上瞬だ」

再び、唯が考えているのか、沈黙が走る。

やがて、唯の声が再び耳に入る。

『分かった。誰か、予備のイヤホンと通信機器を戸上くんに渡してくれる？』

「俺が持つてるから、渡しとく」

『うん、じゃあ4人でビルに向かって。気を付けてね』

「分かったよ、オーバー」

通信を遮断すると、ポケットからイヤホンと機器を取り出し、瞬に手渡す。

「通信機器だ。これで連絡が取れる」

「ありがとう」

片方の耳にイヤホンを付けて、腰に機器を装着し、準備を終える。

やがて瞬は、腰のホルダーからマシンガン H&a m p ; K U M Pを取り出す。ライフルでは接近戦はきついだらうと、副兵装を持っていたのか。

残弾を確認し、瞬もいつでも準備はOKみたいだ。

「……よし、行くぞ」

俺たちはビルに向けて、再び走り始める。

腐るほど現れる怪物たちを次々と退け、やがてビルの入口が見えて

くる。

ここは正面からと言う事で、正面入り口なのだろう。開いたままの自動扉の前に立ち、とりあえず息を整える。

「よし、翔、頼む」

「了解」

少し前に出て、腰から信号弾を発射する銃を上空へと向け、引き金を引く。

それと同時に高速で白い弾が乾いた空へと駆けだし、やがてまばゆい光を發し爆発する。

これで、唯たちはここに来るだろう。みんなが到着すれば、ビルの中に入り、他の方面から突入した奴らと合流する。

しばらく、ビルの入り口で立ち往生をしていると、再び怪物の大群が現れ始めた。

「ちっ、まだ来るのか……」

「ぐずぐず言ってもしょうがねえ、行くぞ！」

銃を構え、発射する。

怪物の大群は波の様に迫って来て、4人じゃなければ恐らく飲みこまれていただろう。

俺はM4のオプションで取り付けていたショットガンをM203グレネードランチャーに切り替え、それを発射した。

怪物に当たると、爆発して、その周りにいた怪物も共に吹き飛ばされ、炎上した。

数が少なくなっただかと思っただ直後、通信が繋がった時の砂嵐のような音がイヤホンを通して耳に聞こえる。

「た、大変です！入口に到着している人たちは右側の入り口に向かってください！」

突如、細の焦った声が耳に響く。

『どうした、細！？』

この声……瀬光紅か。なんか妙に細に対してはしゃぎしゃぎしてるなあいつ。

『右入口の、右後方から巨大な熱源反応！そちらに接近しています！』

『こつちでも確認できた！な、なんだよ……あのかいの……！？』
律の驚きと恐怖が入り混じったような声が聞こえる。

なんだ、なにがいるって言うんだ……？

『こちら唯！わたしたちは、右入口に向かうから、正面入り口と裏口で待機してるみんなは、すぐに右入口の方へ向かって！！』

『日暮遼祐だ！正面入り口班、了解！すぐに右入口へ向かう！』

『こちら灘宮英樹！漣、律、凌、すぐにそこへ行く！』

通信をそのまま開いたまま、俺は通信を聞いている俺を守ってくれていた翔、瞬、龍二の方を向く。

既に敵は撃退しており、三人もさっきの通信を聞いていたらしい。

『いいな、今から律達のところへ向かう』

『了解！』

急いで、ビルの入り口から、直接右入口へと駆けだす。

いったい、何が起るって言うんだ……！？

遼祐たちが戦っている間、同じエリアのビルの上に、何者かが立っていた。

見た目はごく普通の、青年だった。

その手に持つ銃と剣を混ぜた様な武器を見る限り、やはり彼も戦っているのだろう。
ガンフレイド

『……巨大な熱源反応か……』

イヤホンを通して聞こえる、オペレーターの焦った声を聞きながら
呟く。

【マスター、向かいますか？】

「行くしかないだろ。あそこで戦ってる奴らにこの世界の事態をつ
たえるのが俺の仕事なんだから」

【……分かりました。では、行きましょう】

「ちよつと予想外な展開だけど……しょうがねえ、やってやるよ！」

「スターズ05、カズマ・キサラギ、行きます！」

それと同時に、彼はビルから飛び降りた。

NEXT Chapter06「交錯・Cross Drive」

(後編)

遼祐

「まさかのなのはシリーズから!？」

伝説

「うん、『魔法少女リリカルなのはStrikerS』青年と機動六課物語』を執筆中の雪月花先生からの要望だね。

まさかけいおん! 以外の作品から来るとは思わなかったからびっくりしたけど、おかげでいいストーリーが閃いたよ」

遼祐

「世界観、大丈夫か？」

伝説

「大丈夫!……多分」

遼祐

「ダメじゃん……」

伝説

「遅くなって大変申し訳ありません。

EXシナリオ、再始動いたします」

遼祐

「じゃあ、始めるか」

オープニングテーマ

『Casual Chain』歌：遊女

PCゲーム「うたてめぐり」より

当然、怪物はビルの中にもいた。そりゃそうだ、なんせここが奴らの住処なのだから。

4人で奴らを蹴散らしながら、巨大な怪物がいると言う右入口へ急ぐ。

ホールからすぐに右入口に向かえるので、近くにいる怪物だけを倒し、右入口へ向かう。

近づくたびに、みんなの声、そして銃声が耳に嫌と言うほど入る。それを聞くたびに、俺は今戦場にいるのだなと、何度も何度も感じ取ってしまった。

そして、この戦いがますます怖くなる。出た瞬間、死ぬのではないか。そう思ってしまう。だがそれを覚悟の上に戦ってるんだ。今さら後戻りなどできるもんかよ。

ガラスで作られている自動ドア（当然、今は自動ではない）をくぐり、外へ再び外へ出る。

外に出て最初に見たのは、リボルバーを並べる怪物たちに撃ち続ける漣の姿だった。

「漣ッ！」

叫ぶと、弾を再装填リロードしながら、こちらに振り向く。

「漣、巨大な怪物って言うのは!?!」

龍二が聞くと、漣は少し声のトーンを落としながら状況を伝えた。

「いや、まだ来てない……。だけど、ムギが言うには、後5分ほどここに来るらしい」

「5分か……。それまでにこいつらを片づけねえと……。!」

しかし、5分と言ってもこの数百もいる怪物どもをこの短い間に倒せと言っても、かなりきついだろうな。

現在、怪物は近くにいないが、第2波も既に視認できる。

「……英樹さんたちは？」

「まだ到着してねえ。どうやら怪物どもの波と戦ってるみたいだ」

後ろから答えが返ってきたので、見るとそこにはコンクリートの壁にもたれている凌の姿があった。

「英樹さんたちがいればなんとかなるんだろうけど……多分、無理だろうな」

「……って、言ってる間に来たぞ」

律が溜息交じりに、怪物どもの波をげんなりした様な顔で見る。

まあ無理もねえよな。またあんな数の怪物どもと戦わなければならぬのだから。

「……でも、やらなきゃいけねえからな」

「……そうだな」

それぞれの武器を構え、並んで前に立つ。

怪物たちはそんな事関係なしに、どんどん迫ってきた。

「行くぞ！」

俺たちは、奴らの大群の中に突っ走った。

M4を撃ち続け、並いる怪物たちはぱたりぱたりと血しぶきを上げながら倒れていく。

そんな事、お構いマシに俺はただ弾丸を発射し続けていた。

……どうして、なのだろうか。

撃ち続けながら、俺は思う。

何故か、感じた事がある。こんな事を、前にもした様な。

この手に銃を持って、こうして怪物たちを撃ち続けた事を何度も。

「遼祐ッ!!」

龍二の一言に、俺は我に返る。

見ると、死角から現れたカエル型が、俺に飛びかかろうとしていた。当然、俺は銃を構えようとする。しかし、間に合わない。

「うわあ！」

短い悲鳴を上げ、目を瞑る。

その時、横からマシンガンの乾いた銃声が響き、怪物が声を上げて地面に横たわる。

「瀬、瀬光紅……」

銃声が聞こえた方を見ると、そこにはUZIを構えた瀬光紅の姿があった。

「ボケーっとしてんじゃねえ！！死にてえのか！？」

と、俺を怒鳴る。

素直に謝ろうと思った矢先、瀬光紅の背後から怪物現れ、奴を襲うとしている。

俺はすかさず銃を構えて、その怪物めがけて撃つ。そして、

「そりゃこっちの台詞だ！！」

瀬光紅に近づきながら、怪物を倒し続ける。

「ったくよお、最近の特殊部隊つてのはまともに訓練すらしてねえのか！？」

「んだとこの野郎！！」

とか言いながら、背中合わせになって怪物たちに銃弾の雨を浴びせ

る。

「しょうがねえだろうが、訓練なんてまともにはせずに戦場に出たんだ！」

「だから言ってるんだろ！バカかお前は！？」

「喧嘩せずにさっさと倒せ！」

溲の音が聞こえるが、どうでもいい。

こいつとはここで決着をつけるべきだろう。

「……ようし、じゃあこいつらをさっさと倒してあのデカ物を先に潰した方の勝ちだ」

「……勝ったらどうする？」

「そつだなあ……、まあそんな時考えようぜ」

そう言いながら、大きな足音が同時に聞こえた。

音が聞こえてくる方を見ると、そこには本当に巨大なゴリラの様な怪物、そしてカエル型と犬型が数十体ぐらいいた。

それを見ると、俺たちは同時ににやりとする。

「「おらあああああああああああ！！！」「」

正直に言おう。あのデカブツ、かなり手ごわかった。

銃弾がまともに入らない。あの体、オリハルコンでも出来てるんじゃないかねえのか？

おまけにグレネードの爆発も効かなかった。

……つまり、勝てる方法はないんじゃないのか……？

「英樹さんの力ならいけるかもしれない……」

「でも肝心の英樹さん、まだ来てないですよ！」

くそ、どうすりゃいいんだ……。

俺はいいとして、他のみんなは弾丸が減る一方だ。

実際、既に漣と瞬は弾が無くなって、ビルの中に避難している。

どうすればいい、どうすれば……！

と、他の事を考えていたせいで、自分が攻撃される直前だと言つ事に気がつかなかった。

「遼祐……！」

やべ、俺、ここでおしまいだよ……！

「ブレインバスター……！」

上空から大きなビームでできた弾が飛んできて、それが怪物に着弾し、爆発する。

激しい爆風で、目を開けていられなかったが、やがて風が収まったので、恐る恐る目を開ける。

目の前にはあのデカブツの黒焦げになった死体が倒れていて、その前に誰かが立っていた。

「……大丈夫か？」

そいつは、かがんでいた俺に手を差し出す。

「あ、ああ……あんたは？戦線の奴？」

「いや、ちょっと違うな」

そう言つて、一息つく。

その間に、他のみんなも集まってきた。

「カズマ・キサラギ。時空管理局機動六課スターズ分隊だ」

「……つて、なんだそれ」

俺には何が何だか分からなかった。

当然、みんなも首をかしげていた。

そんな様子を見ながらも、カズマは話を続ける。

しかも、いきなりとんでもない事を言いやがった。

「俺は、並行世界から来たんだ。この世界で今何が起こっているか、そしてこれからの事についてを話しにな」

武器の補給、そしてまさかの新たな怪物の出現で撤退せざるを得なかった俺たちは、キャンプへと引き返した。

それに、もうひとつ。カズマと言う男の言う事を聞く必要があると唯は考えたからだ。

「じゃあ、話してもらおうか。いったい、何が起きているのか」

英樹さんがそう言うと、カズマは口を開く。

ここはいつもの会議をするテント内。俺のほかに唯、律、漣、紬、英樹さん、瀬光紅、瞬がいる。

瞬は正式に戦線のメンバーとして加わり、現地の人間代表と言う事でこの場にいる。

「ああ。……まず、はっきり言う。未来では、この戦線は全滅している。……さつき、のデカブツによって」

「……まあ、事実そうだろうな」

カズマがいなかったら、きっと俺たちは全滅していた。

英樹さんがいたら分らなかったかもしれないという考えも、どうやら無駄だったようだ。

「……そして、世界はやがて崩壊し、この事態に管理局はようやく動いた」

「どうして今さら？」

「管理局は、並行世界への介入は非常に難しいものと判断していた。まあ、事実だったんだけどな。」

異世界への介入なら前例は腐るほどあったんだけど、並行世界への介入は一切無かった。だから、判断するのに時間がかかったって訳だ」

「で、察するに、お前は並行世界への介入第一号になったと？」

「そういうことになるな」

それにしても……って、待て。

だとしたら……。

「おまえが介入したことで……」

「ああ、未来は変わる」

なんてこつた……。

こつからはじゃあ、誰にも未来は分からないって事なのか。せめてどんな状況で崩壊したとかって言うのでも分かれば、なんとかあったんだけど……。

「その代わりに、これを見てほしいんだ」

と、カズマは管理局の制服のポケットからUSBメモリを取り出した。

早速、その中身をチェックするために紬のノートパソコンへ挿入。その中に入ったデータは、あの怪物たちの様々な詳細データだった。カエル型や犬型、今回新たに出会った巨人型。他にも虫型や人間型などもいるようだ。

「これは管理局が独自で入手した奴らの資料をコピーしたものだ。役立ててほしい」

「……ありがとよ。で、お前はこれからどうするんだ？」

「……本当はこの事を伝えたら帰らなきゃならない予定だったんだけど、介入した以上、このまま放置して訳にはいかない」

「……一緒に戦うのか？」

「ああ、そうさせてもらおうよ。……頼めるか？隊長」

そう、カズマは唯に問う。
しばらく考えている表情だったが、やがて、

「うん。じゃあ、カズマ君を戦線へと入隊させます」

「よろしくな」

そう言って、唯と握手した。

今後の作戦は、3時間後に説明することだった。

それまで、俺たちは他の場所で活動している仲間の戦線に帰還してもらい、戦力をここに集結させる。と言うのが唯の考えだった。

俺は瀬光紅といっしょに高台で見張りをしていた。龍一と翔がしていたのだが交代することになった。

「……瀬光紅」

「なんだ？」

「あん時はありがとうよ。おかげで、死なずにすんだよ」

「あの事が。別に、お前が死んだら戦力がダウンして戦線が勝てる確率が減るって考えたからだ。てめえを助けたわけじゃねえ」

……ツンデレかこいつ。

一瞬、そう疑ったがまあいいとしよう。

さてとそろそろ本題に入るか。

「……で、その右腕、いつたいどんな秘密があるんだよ」

そう言うと、瀬光紅は一瞬、俺を睨んだ。
だが、すぐに視線を夜空へと戻し背もたれにもたれかかる。

「……いつ、分かった？」

「最初に会った時からさ。お前、あん時俺に聞かれた時、何にも答えなかっただろ？逆にむしろ殺すぞって」

「それがどうしたんだ」

「何にもなけりゃ、別にまくってるだけとかって言えばいいのに、そんな物騒な事を言うほど隠さなきゃいけないもんだなって」

「俺の性格からしてそういう事を言うなとか思わなかったのか？」

「最初はそう思ったけど、な。さっきの一言で分かった」

「……お前、俺をはめたのか」

そう言う事。

溜息をついて、瀬光紅は俺を見る。

「……特殊部隊に入隊したのは、ただこの崩壊した世界を救うからとかじゃねえ。ただ、守りたいもんがあったからだ」

「守りたいもの？」

「そいつは言わねえけどな」

「どうせ女だろ？」

「……言うのやめるぞ。それで殺すぞ」

再び鼻先にUZIを突きつけられ、冗談だよと言う。舌打ちをして、銃をしまう瀬光紅。

「それで、入隊してその直後に戦闘になった。でも、仲間は隊長と俺を残して全滅した。」

俺たちは死ぬ気で戦った。そして、全滅させた。そう思ったんだ。だけどよ、最後の最後に、裏切られた」

「……隊長にか」

「ああ、フリーデンの息がかかった奴だったんだ。そいつに掴まって、人体実験を受けさせられた。強制的にな」

「英樹さんと同じだ」

「そして気がついたら、こういうことだ」

右腕をまくと、そこには血管が大きく浮き出て、脈打っていた。そして紅く染まって、元の腕の面影はほとんどない。

「……こんなもん見せて、戦線には入れねえからな。今まで隠してたんだ。英樹さん以外にはな」

「……そうだったのか」

「ああ。あの人は、信用してもいいと思っただ。今まで、何度も裏切られた……そんな俺が唯一信用してもいいと思っただ」

「じゃあ、他の奴らは信じてねえのか？」

「そんな訳はねえけど、まだ安心できないんだよ」

よっぽど、今まで酷い目に会って来たんだと思う。

人を信じれなくなるぐらい、辛い目に会っただろう。

でも、俺は何かを言う事が出来なかった。

そんな目にあっただけはない、俺が下手に何かを言おうとは思えなかったからだ。

だけど、これだけは言える。

「……まあ、信じる信じねえ勝手だけど、せつかく一緒に戦うんだから、信用してもいいんじゃないか？」

「……」

「色々あったのは、分かるけど、でも、せつかく戦うんだ。びくびくして戦うより、背中を任せて、お前は前向いて戦えよ」

「……分かったような口聞きやがって」

「悪かったな。まあ、お前の嫌いな遼祐くんの意見だ。好きなように受け取れ」

そう言って、俺は高台から見張りを続ける。

しばらくの間、瀬光紅と会話は無かったが、やがて。

「……瀬光紅じや呼びにくいから、凌って呼べ」

「……やっぱりツンデレか、お前」

「……やっぱり死ね」

「遠慮しておきます。凌。」

Chapter 06 「交錯・Cross Drive」 (後編) (後書き)

次回予告

唯「地下へ行く部隊と上へ上がる部隊に分けよう」

霧明「ここに敵か……！」

カズマ「こいつら、しつこいんだよ……！」

龍二「彰！」

彰「行くぞ……！」

遼祐「お前らは……！」

黒き勇者「……初めまして。みんな」

NEXT Chapter 07 「壊滅・Genocide」

エンディングテーマ

『光』歌：BREAKERZ

名探偵コナンより

Chapter 07 「壊滅・Genocide」 (前書き)

伝説

「今回はすごいっすよ。なんせ遼祐が実写バイオで言うアリス並の

」

遼祐

「ネタばれ厨タヒね」

始まります

Chapter 07 「壊滅 - Genocide」

1時間ぐらいした後だった。

唯が集まってくれと言ったので、俺は集まれと言った場所へと行く事に。

そこへ行くと、トラックが何台か並んでいた。

どうやら別々に行動していた戦線のメンバーが合流したようだ。

「霧明、彰、黎兒、無事に帰って来てくれてよかった」

英樹さんがほほ笑みながらそう言うと、霧明は、

「英樹さんこそ、無事でよかったですよ」

そう言って、礼をする。

彰と黎兒も英樹さんと親しげに話す。

ホント英樹さんって信頼されてるんだな。

改めてそう実感させられた。

榎瞳黎兒、風星霧明、月神彰の三人はその後、唯の所へ報告へ行った。

三人はここから南方面を調査しており、そこには『フリーデン』のアジトがある事が分かった。

しかし、今はテロリストのアジトを優先するべきだろう。そう判断した唯は、一部の戦力をフリーデンのアジトへ回すことにした。残った戦力は、これから1時間後に再びアジトへ突入する事となった。

そして今俺たちは、トラックで再びアジトのビルへと向かっていた。

「……遼祐」

「なんですか？」

突然、横で運転している英樹さんが声を掛けてきた。

珍しく、英樹さんから話しかけてきたので少し驚いた。

「……恐らく、これが最後の戦いになるだろう」

「そうっばいですね」

銃を眺めながら、返す。

英樹さんはしばらく間をおいて、再び口を開いた。

「唯は、絶対に守ってやれ」

「……分かってます。そいつだけは心に刻み込んでます」

「それでいい」

なんだろうな、俺。

唯は俺の彼女だし、いや、もうそれ以上の存在かもしれない。

だけど、どうして俺はここまであいつを守りたいと思うのだろう。

ただあいつが大切だから、そう言ってしまうえば終わりなんだけど、

どうしてここまで？

命を捨てても守ろうとする……どうしてなんだ？

何が、俺をそうさせるんだろうか。

再び、あのビルの前に来ていた。

不思議な事に、ここまで来るのに怪物たちは全く現れなかった。入口からビルのホールへと入る。

中はほこり臭く、まったく手入れされていない事が一発で分かる。……だが、手入れされてないだけ。『中には誰が入っている』。

「こいつは、足跡だな……」

彰がしゃがんで、その足跡を観察し始める。

手入れしなかったため、床に埃がたまっており、その上を誰かが踏んで足跡が出来ていた。

しかもその数、一人や二人じゃない。かなりの大人数だった。

「足跡は上へ向かう階段と、下へ向かう階段に分かれてるな」

黎兒がそう言っつて、今度は瞬が、

「どうするんだ、唯？」

「地下へ行く部隊と上へ上がる部隊に分けよう。それで、そのメンバーだけ……」

「唯と英樹さんは分けた方がいいと思う」

龍二の意見はもつともだ。

隊長と副隊長だ。この二人を分けないと、指揮系統が狂うだろうしな。

と言う訳で、二人がそれぞれメンバーを選ぶことになった。

唯の地下へ向かう部隊は、唯、翔、彰、龍二、黎兒、漣、霧明、白銀、俺だ。

英樹さんの上へ向かう部隊は、英樹さん、カズマ、純、瞬、凌、梓律、浩史となった。

それぞれ最上階、地下まで調べ終わったら連絡後、ビルの外で待機している他の隊員たちと合流し、そのままもう片方の方へ合流すると言う事とのだ事。

そして、作戦は開始。それぞれの場所へ向かった。

先頭を俺と翔が歩く。

その後ろに他のみんながついて来ていた。

地下は案外暗く、予め銃にフラッシュライトを装着しておいて正解だった。

現在、地下1階。階段を下りてすぐに廊下があり、今その廊下を歩いている。

「なあ翔、聞いてもいいか？」

「ええ、なんですか？」

横で銃を構えながら歩いている翔にある事を聞く。

「このビル、元々なんのビルなんだ？」

「確か、普通の保険会社だったと思いますよ」

保険会社か……にしちゃでかい様な気がするんだけどな……。まあ、そんな事はさておき、奥まで歩くと、やがて鉄で出来た扉が目についた。

「……なんか、すっげえやばそうな雰囲気だ」

「でも、行かないと」

そう言って、唯は扉の前に立つ。
そして。

「ッ!?!」

やあッ!?!

待ってりょうくん!それは!?!

「!?!」

なんだ今の……。さっきの……この風景で、俺が扉を壊そうとしていた。でもそれを唯が止めて。

ぐあっ……！！

りよ、りようくん！！

ボウガンの矢が俺に刺さった……？

……ブービートラップか。

って、じゃああそこで唯が扉を破壊すると……！！

しかし気づいた頃には、唯は既に剣を振り下ろしている最中だった。迷っている暇はない。俺はすぐさま唯に飛びつく。

剣は振り下ろされ、扉が破壊された直後に俺の腕が唯の腰に巻きつかれ、そのまま同時に倒れ込む。

「ふせる！お前らッ！！」

みんな何が起こったか分からず、俺と唯以外のみんなは言われるがまま、床に伏せた。

その瞬間、十数本ほどの矢が破壊された扉の残骸を飛び越え、飛んでくる。

だが全員床に伏せていたため、矢が当たる事はなかった。みんなはゆっくりと立ち上がった。

「大丈夫か、唯？」

唯に手を差し伸べて、それを唯は素直に受け取る。

立ちあげて、唯は一息ついて、

「……なんで、分かったの？」

「……分かんねえよ。頭の中に、トラップが飛んでくる風景が浮か

んで……」

「予知能力……」

漣がうわごとのように呟く。

そう、まさにその名の通り。俺には予知能力が付加しているようだ。いや、でもまさかね。そんな訳がないだらいくらなんでも。だけど、どう考えても予知能力だ。

「……でも、ありがとうねりょうくん」

「ああ」

「って、ここは……」

彰が部屋を物色し始める。

いや、物色と言うか……見渡すと言った方がいいだろう。かなり広いのだ、この部屋は。ってか、部屋と言ったら逆に不自然なぐらい。

コロシアムの様な所だ。

しかも床には大量の血の跡。これは……。

「間違いない、これ、あいつらの戦闘実験の跡だ」

黎兒の言うとおりだ。

この鼻につく怪物どもの匂い。

ここで、戦闘実験でもしていたんだろう。

『しし名答』

突然、スピーカーを通して男の声がした。

スピーカーを探すと、丁度のその場所に硝子があり、その奥に人影があった。

俺たちは銃を構え、奴と対話を続ける。

「あなたは誰なんですか!？」

刀の柄を鞘にしまって持ったまま、龍二が質問する。
だいたい予想はつく。が、一応確認した方がいいだろう。

『そうだな……テロリストのボスの手下……って言った方がいいな』

「……なるほど。それで、俺たちをここに誘いこんで、何が目的だ？」

『……すぐわかるさ』

そう言つて、後ろの壁にあったシャッターが開く。

そこから、カエル型と犬型、そして新型の虫型の姿があった。
しかも、かなりの数だ。

「マジかよ……」

『どつする?今ここで、リーダーを引き渡せば、なんとかしてやる』
『よ』

リーダー?唯を?

唯を見ると、その目は既に覚悟したような目だった。

……まさか。

「……分かった。おねがいだから、みんなに手を出さないで」

『物分かりのいいリーダーだな。んじゃ、反対側にあるシャッターに入れ』

そう言いながら、唯は剣を背中に背負って、そこに入るうとする。

行っちゃダメ、りょうくん。

……まただ。

でも、最初からこうするつもりだ。

そう言っつて、俺は手を伸ばして、唯の歩行を阻止する。

「りょうくん……?」

「行くな、唯」

『おいおい、物分かりのわりい隊員がいるんだな』

「悪いな、うちはあれぐらいの怪物ごときでやられるような隊員はいねえんだよ」

そう言い放つと、スピーカーから声はしばらくの間聞こえなくなるが、やがて、

『……なら死ね』

そう言つて、怪物たちがこっちに突撃し、ガラス越しから見えた人影が姿を消した。

俺たちは突撃してくる怪物を迎え撃つ。

一斉射撃しながら、弾が当たらずに残った怪物どもは、

「彰！」

「行くぞ！！！」

彰と龍二の刀コンビに任せる。

それにしてもこの二人、どんだけ強いんだよ。

つてかさ、思ったんだがこの世界、塵骸魔京かよ。

「あ、遼祐！！！」

漣が俺の名を叫ぶ。

ふり返ると、カエル型が爪を振りかざしていた。

よけようとするが、完全には避けられず、爪が俺の頬を裂く。

それと同時に、つい銃を手放してしまい、結構遠くに飛んで行ってしまった。

取りに行きたいけど、既に怪物に囲まれてしまっていた。

……… しゃあない。

飛びかかってくるカエル型から逃げようと背を向けて壁へダッシュする。

と、逃げるわけじゃない。そのまま壁をキック、その勢いでカエル型に蹴りを食らわせた。

直後にもう一体も飛びかかってきたので、回し蹴りを食らわせた。直後に、

「りょうくん!」「遼祐!」

唯は剣を、漣はマグナムをそれぞれ一丁ずつ投げつける。
ありがとよ。それを同時に受け取り、剣で着地しながら犬を一刀両断。

直後に銃でカエルの頭を撃つ。そして虫型がこっちに向かって走ってくるのでこっちも突撃。

そのまま剣を突き刺し、足でそいつを引っこ抜いた。

そいつが最後の一体だったらしく、クリーチャーの死体が広がっていた。……地獄絵図だ。

「ありがとな、唯、漣」

そう言ってそれぞれの武器を渡す。

「……遼祐、お前、本当に人間か?」

「……霧明、お前かなり失礼な事言ってるぞそれ」

「悪い」

とはいっても、あんな動きしたせいで、俺もなんだかそれを疑ってしまった。

正直、なんか人間って感じがしなくなってきたしまった。
と、霧明の表情がすぐに変わる。

「霧明?」

「伏せろ、遼祐!」

霧明は手に持っていた薙刀を投げつける。
その薙刀を目で追うと、死んだと思っていたカエル型に突き刺さった。

そして辺りを見渡すと、次々と怪物たちが甦る。

「ど、どうなってんだよ!？」

「さっきまで死んでたはずでしたよね!？」

白銀も俺も驚いた声を出すしかできなかった。

「みんな、あつちに逃げよう!」

唯が指さした扉にみんな銃を撃つたり、斬りつけながら走った。

俺はドアノブを撃つて、扉を蹴りつけて開ける。

「こつちだ!」

龍二が先頭をきつて、廊下を走るが辺りも怪物だらけ。

「ここにも敵か!!!」

薙刀で霧明は敵を薙ぎ払いながら叫ぶ。

なんでこんなに敵がたくさんいんだよ……。

どうなってんだ……。あいつら、いったいなにが目的なんだ……?」

しばらく走り続けると、奴らの姿は無くなった。

が、また広い空間に出てきた。結構暗いし。

……ホント、こういう所に出るとロクな事がない。

「なんだここ……？」

「実験場でもなさそうだし……」

だがまたここで変な奴も出そうだし……。

「俺たちみたいなの事……か？」

そうそう。お前らみたいな。
って、誰だよ！？

「ごめん、今姿見せるから」

屋根から刺す月の光を浴びて、誰かの姿が浮かび上がる。
さっきの声の主……か？

「……初めまして。みんな」

そこにいたのは、俺たちと同じぐらいの青年二人と、女の子一人だった。

Chapter 07 「壊滅・Genocide」 (後書き)

次回予告

英樹「あいつ、いったい何を……？」

龍一「離せ、離せ……！」

雅「逃げてみんな！ここは僕が……！」

レイン「さあて、どうするんだ？」

凌「うっせえ、やるっきゃねえだろ！」

翔一「行くぞ、スパイダー……！」

渡「アイスソード忘れんなよ……！」

遼祐「そっか、俺……『俺』じゃねえんだ」

Chapter 08 「真実・truth」

Chapter 08 「真実・truth」 (前編) (前書き)

伝説

「……さて、行くか」

遼祐

「どこに？」

伝説

「……明るい未来に」

遼祐

「厨二病か!!」

Chapter 08 「真実 - truth -」 (前編)

遼祐たちが謎の青年たちと遭遇した同じ頃。

上の階へと向かった英樹たちは、当然のごとく怪物たちと死闘を繰り広げていた。

「くそ、しつこいんだよお前ら！」

《イノセントバスター》

カズマの放った魔力弾が怪物たちへと襲いかかる。

怪物たちはそれに気づくがもう遅い。体を貫き、魔力弾は貫通して次々と怪物たちの体に穴を開けていった。

やがて怪物の姿は無くなった。

「……なんとか、倒したな」

「結構、量が多かったですけどね……」

律が肩で息をしながら、M1911のマガジンを変える。

同じく、英樹も一息つくと窓から地上を見下ろす。

ここは38階。ビルの最上階だ。

ここからなら、少し離れた英樹たちがいた街も見ることが出来るが、

見てもしょうがないくらい何も無い。

あるのは残骸だけ。それを見て、何人の人間が様々な感情を抱いたものか。

冷静になろう。英樹は頭を切り替え、すぐに凌の所へ向かう。

「……腕の方は、大丈夫か」

「……なんとか」

「何が起きるか分からない。そこは攻撃させるな」

「そのつもりですよ」

二丁のUZIのマガジンを切り替える。

一方、瞬は自分が住んでいた街の様子を見て言葉が出なかった。

確かに、どんなことになってるかは分かっていたが、それを全部見下ろすと、言葉に出来ない。

ただ、色んな感情が胸の中を渦巻く。

「……くそ」

奥歯をかみしめながら、窓を殴る。

強化ガラスの為、割れる事は無いが叩いた時の鈍い音がフロア全体に響いた。

「瞬……」

すぐそばにいた、律が何か声をかけようと言葉を探すが、どう言え
ばいいのか分からなかった。

だから、律はそっとしておくことにした。1人にさせてあげた方が

良い。そう思ったから。
律には瞬の気持ちがよく分かっていた。自分も同じだった。
最初にこんな事が起きた時は、ただ自分の力の無さにいらつく事が
たくさんあった。
だからこそ、強くなる。そう思った。
それは瞬も同じだった。

「……………これ以上、悲しみを増やさない……………!!」

終わらせる。この狂った悪夢を。

誰もが持つ思いを改めて確認し、瞬はふり返って英樹たちの所へ行
こうとした。

……………その時だった。異変に気づいたのは。

「なんだ、あれ……………?」

瞬が見たのは、ビル入り口の様子だった。

怪物が群がっていたのだが、それが次々と消えていっていた。

いや、消えてはいない。吹き飛ばされていた。

ビルの入り口では、ランニングジャケットを着た青年、特殊部隊の
様な服を着た青年二人が、怪物たちと戦っていた。

1人は高井翔一。遼祐やカズマと同じく異世界から来た人間だ。

また、魔術師であり、その実力は確かだった。

「こつちだ！着いて来い！」

怪物たちを挑発しながら、敵をビルの入り口へと誘い込む。

思考能力がないに等しい怪物は、翔一に言われるがまま、着いて行く。

そして、

「今だ、渡、彰！！」

後ろにいる渡と彰と呼ばれた二人の青年に、合図をすると同時にそこから弾丸とボウガンの矢シャワーが怪物たちに浴びせられる。

次々と倒れていき、怪物たちは悲鳴を上げながら一体一体、床へと力なく倒れ込む。

残った虫型は、翔一が魔力強化した蹴りでダウン。そのまま動かなくなつた。

「なんとか、片付いたみたいだな」

「そうみたいだな……」

三人は怪物たちの死体の山を見て、呟く。

「でも、これで確か見たいですね。ここが……」

「あいつらの本拠地……って事か」

三人の視線の先には、ビルのホールにあった大きなエンブレムに集中していた。

このエンブレムはこの会社のもの。

渡たちはこのエンブレムのある会社のビルの地下にテロリストの本拠地があると聞いて、やってきたのだ。

「でも、やっぱり先に来てる奴らがいるみたいだな……」

「確か、この辺で活動してる戦線が先に来てるんでしたね」

「ラッキーだよな。たまたま無線聞いてたら、この人たちの通信の内容が聞けたんだから」

渡が使い捨てられたマガジンを放りなげる。

その後、すぐに三人は地下へと続く階段を昇り始めた。

先頭を歩いている彼は、加藤渡。

遼祐たちとは同じ目的で、テロリストの行方を追っているが戦線の事はつい最近知った。

それは彼の相棒ともいえる、金沢彰も同じだった。

二人で世界を渡り歩いていると、たまたま出会った翔一も加わり、今に至る訳である。

「でも……戦線の人たちって……」

「……多分、この街の入口にいた奴らもだろうな」

この街にいた他の待機していた隊員の事だった。

三人は彼らとは出来るだけ接触しない様に、街に潜入した。

何を言われるか分からないし、下手に見つかりと後々が面倒になる。そう判断したからだ。

「だけど、ここまで来ると、やっぱりあの人たちと協力した方がいいんじゃないか？」

「……まあ、それはこの地下にいる戦線の奴らに
会ってから決めよう。そういいかけた直後だった。
床が突如開いて、三人はその穴の中に落下した。」

「「「うわあああああああああああ！！！！！」」」

なるほどな。大体話は分かった。
突然現れた、黒き勇者……いや、黒崎雅とか言う奴の話を知ると、
どうやらこれまたややこしいものだ。

このテロリストに協力している黒龍鈴我とか言う奴を追って、わざ
わざ異世界から来たようだ。

ちなみに、まだあと二人仲間がいるのだが二人はこの世界に来た時
にどこか違う所へ迷い込んでしまったらしい。

雅の話を知ると、このビルの中のどこかにいるようだ。
うへえ……また異世界か。魔法の世界といい、ほんとなんでもあり
だなこの世界。

で、横にいる男がフラットで、その横の女の子がサーミ。

「それで？これからはどうするつもりなんだ？」

「出来れば、奴を倒すために協力してほしいんだ。あいつは……本当に強いから」

大丈夫だろ。このチート軍団ならどんな奴でも倒せる気がしてきたぞ。

「……だと、いいんだけど」

雅が少し低い声で呟いた。

……よっぽど強いのか？それとも……。

何か言おうとする直前だった。横にいたレインが声を上げる。

「おい、追って来たぞ！！」

後ろを振り返ると、これはまた凄い数の怪物たちがいた。

さっき追ってきた奴らだろう。……やべえな。

「任せて！」

と、銃を構えようとした直前に雅とレインとサーミがいつぺんに俺たちの前が出る。

三人であの数を！？大丈夫なのかよ……。

だが、その不安はすぐに取り除かれることとなった。

「天落『スターメテオ』！」

そう言った瞬間、怪物たちにどこからか現れた隕石が降り注ぐ。それだけじゃなかった。

「幻想投影発動！『スターライトブレイカー』！」

フラットがそう言うと、ピンク色の極太ビームが怪物たちを薙ぎ払う。

そして残った奴らを、サーミが両手剣を持って、残った怪物たちを切り刻んでいった。

あんなだけいた怪物が、一瞬で消えた。

……もう駄目だこりゃ。ついに我が戦線は人類史上最強の集団になっちゃったよ。本当に塵骸魔京だよ。

「こんなものかな」

こんなものかなじゃねえよ、どんだけ強いんだよお前ら！？

……ってちよつと待て。じゃあその黒龍って奴……。

「……うん、こんなものじゃないよ」

「……やべ、やっぱり不安になってきた」

溜息をついたと同時に。

突如この部屋の入口のシャッターが閉じられた。

「な、なんだ！？」

「くそ！」

銃を撃つがびくともしない。

「雅！レイン！」

魔法かなんか知らんが、シャッターを壊すように言った。二人は同時に発動して、シャッターを破壊しようと試みるが、結果は同じだった。

って待て。このチート二人でもダメって……！どんだけ強度高いんだよ……！

『当たり前だろ。そいつらより強い奴に作ってもらったんだから』

どこからか、聞き覚えのある声が聞こえた。

あの闘技場の様なところにいた奴だ。

「なんだと!？」

「それってもしかして……黒龍……!？」

『さあな。ま、どうせあいつに会う前にてめえら死ぬんだからな』

その直後、天井からプシューっと白い煙の様な物が噴き出す。

「このにおい……ガスだ!」

霧明が言つと、すぐに鼻と口をふさぐ。

が、それは無駄な努力だった。

催眠ガスなんだろう。少しでも吸うと、眠気が襲って来た。

『……眠ってる』

「て、めえ……ッ……!」

遅かった。
俺の意識は、闇へと葬られた。

……目覚めて。

……オマエ、ダレダヨ？

あなたを作ったの。親……って言えばいいのかな？

オヤ……？

……あなたに、頼みたい事があるの。

タノミ……？

世界を救って。この壊れた世界を。

セカイ……。コワレタ……。

……どうかな？

……ワカッタ。ヤル。

ありがとう。あ、まだ名前を言ってなかったね。わたしは……。

「……ん……？」

夢が途中で終わって、うつすらと意識が戻る。

遠くで水音がして、男の笑い声も聞こえた。

どこだ、ここ……。確かガスかなんか吸って……。

「！！」

勢いよく重い体を鞭打って上げて、周囲を見渡す。

殺風景な黒い……。岩でできた壁が広がって、自分がいま向いている方には鉄格子がある。

そこから外を眺めようとすると、どこからか銃を持った兵士の様な男が、

「貴様！そこから動くんじゃない！」

「ッ……！」

ちっ、下手すると殺されるだろうな。

俺は大人しく鉄格子から離れて、座りこむ。

あの後、俺たちは捕まったのだろう。みた感じ、辺りには誰もいない。

いや、『俺の仲間』はいない。だが、目の前にあるもうひとつの鉄格子の奥には、人の気配を感じる。

そこに絶対に誰かいるとは限らないが、気配はした。

と、その直後、どこからかドアが開く音がして、

「おい、飯の時間だ。食いに行こうぜ」

新たに出てきた兵士が目の前にいる兵士に声をかけた。

「そうだな。腹が減っておかしくなりそうだったんだ」

「んじゃ、行くぞ」

そう言つて、二人はこの空間から離れた。

それを目で追つていて、完全に姿が消えるとふう、と息を整える。

……そして、

「……いんのか、そこに誰か」

返事は無い。

だが、しばらくすると鉄格子を掴んで、そこから同い年ぐらいの青年の顔が見えた。

「……お前は？3時間ぐらい前にここに来てたけど」

「ああ、ちょっとドジってあいつらに捕まった。アンタは？」

「似たようなもんだよ。1人でここに来て勝手に捕まった」

「そいつは災難だな。俺が言えた様な事じゃないけど」

笑えない、笑いたくもないジョークだったが雰囲気悪いここでは結構な笑いの種だった。

二人でニヤニヤ笑っている。

……こいつも、あいつらに何か恨みでもあるんだろうか。
だったら、協力することができんじゃないか？

「……なあ、針金なんか、細いもんじゃないか？」

こっから脱出するしかない。

幸いなことに、この鉄格子の鍵、対して複雑なものじゃない。
穴に何か突っ込んで適当に漁っていれば自然と開くだろう。
だが帰ってきたのは残酷な答え。

「悪い。ポケットの中にあるゴミから何まで全部取られた」

ゴミまで……？おいおい、どこまであいつら几帳面なんだ。
溜息をつきながら、立ちあがって尻についたほこりを払う。
そして息を整える。

「おい、お前何するつもりなんだ……？」

多分分かっていると思う。

まあ、やるだけ無駄かもしれないがやってみる価値はある。
今の俺なら、やれる気がする。

「おらあー!!」

扉に向かって、思いつき蹴りをかます。

そしてまあ、扉がもろかったのかそれとも俺があれなのか、扉はい
とも簡単に崩壊した。

いや、形を変えて吹き飛んだといった方が正しいだろう。

「……本当にやりやがった」

「んじゃ、俺行くから」

「つて、助けないのか!？」

「助けてほしいなら」

「普通そう思うだろ!？」

いや、すまん。「冗談だ。

扉の前から遠ざけて、再び扉を壊す。

派手な音と共に吹き飛ぶ。

「ありがとう。俺は山崎れお」

「日暮遼祐だ。それで、これからどうする?」

「仲間と一緒に来たんだろ?そいつらも助けて、武器を入手してそれから考えよう」

「……了解」

それと同時に、飯を食いに行ってた兵士の慌てた声が聞こえた。

多分さっきの音で来たんだろう。つてか、それしかないか。

俺たちは顔を見合わせて頷くと、この部屋の扉のすぐ横に立つ。

兵士たちが扉を開けて、部屋に入ってきた瞬間、俺たちは一斉に兵士に襲いかかった。

二人だけでラッキーだった。

「さて、と」

兵士から武器と弾薬、そして小型携帯端末 PDAを奪って、牢屋に叩きつける。

M4カービンを手に持ち、CZ75を腰に刺すと、行動開始。通路を二人でこそこそ通り、通ってくる兵士を隠れてやり過ごしたりして唯たちを探す。

PDAのソフトウェアの中に、地図機能があったのが非常に幸いだっただ。

やがて、独房室を発見すると、こっそり扉を開ける。

もちろん、中には兵士がいた。が、その独房の中には白銀や霧明たちがいた。

だが、唯と龍二と雅、サーミとレインはいなかった。

「とにかく、まずは彼らから助けよう」

ドアを閉めて、れおがそう言つと俺は頷く。

「けど、どうやって行くか……」

そう言いながら、何か方法は無いか考える。

と、俺はPDAを取り出し、弄り始める。

「どうかした？」

「……あるぜ、方法」

白銀たちは困惑していた。

白銀が目を覚ますと、独房の中だった。

全員、同じ所に閉じ込められていたのだが、唯や雅たちの姿がなかったことに驚いた。

「どこに行ったんすか、唯先輩たち……」

「さあな……けど、まずはこっちが優先だな」

霧明が立ち上がり、独房の入り口に顔を向ける。

そこには銃を持って武装している兵士が3人いた。

武器がない白銀たちは脱出しようにもできなかった。
と、どこからかピピピと電子音が鳴る。

「おい、お前のPDAじゃないのか？」

兵士の一人が口を開き、ポケットからPDAを取り出す。

次の瞬間、

「おらあああああー!!」

ドアから二人の男が飛び出してきた。

遼祐とれおだった。

不意を突かれた兵士たちは判断力を失ってしまい、身動きが取れず、

そのまま二人のタツクルをもろに食らい、二人の兵士はダウン。残った1人は、遼祐がボコボコにして気絶させた。

「ひ、日暮さん！」

「よう白銀。待ってる、すぐに助けてやる」

PDAを弄って、それを独房のドアにある黒いプラスチックでできた認識装置に当てると、ピーという電子音と共に扉が開いた。

「ありがとうございます、遼祐さん」

翔がお礼を言いながら最初に出てくる。

そこからゾロゾロと捕まった仲間たちが出てきて、唯たち以外全員がいる事を確認すると、遼祐は、

「唯たち、どこにいるのか知らないのか？」

「俺たちも分からないんですよ……」

そりゃそうだよな……。

遼祐は溜息交じりにそう言った。

ビルの地下水路を歩く三人の姿があった。

トランプによって地下水路に落下し、ついさっきまで気絶していた。やがて目が覚めて、こうしてビルに向かうための階段がエレベーターを探している最中なのである。

「さっきから、同じ所ぐるぐる回ってないか……?」

翔一が言っているのは事実だった。

地下水路は非常に複雑な作りとなっていた。

「だけど、地図もないんじゃない……」

「……シッ!」

人差し指を鼻に当て、彰が会話を中断させる。

「どうしたんだ、彰?」

「……音が聞こえる」

その音の存在を伝えられ、翔一と渡も耳を澄ます。

確かに、ピピピと言った電子音が聞こえていた。

音のする方へと三人が歩み寄る。

「な、なんだよこれ……!??」

音のするところは、少し明るくなっていた。

そこに懐中電灯を当てると、血まみれになっていた兵士の遺体が壁によりかかっていた。

腹部に何かで貫かれた跡があり、それが致命傷となっていた。

その兵士の手元から、その音は鳴っていた。

「これ……PDAか？」

水をかぶっていたが、防水仕様なのか問題なく動いていた。渡がそれを手に取ると、画面にはメールを受信しました、と表示されていた。

しかしメールの内容は何も書かれておらず、空メールと言ったものか。

「……一応、持っとくか」

渡はそれをふき取り、PDAのメニュー画面に戻る。と、そこである物を目にする。

地図機能だった。今の三人にとって一番欲しかったものだ。早速その機能を使用すると、地下水路の全体図が表示され、紅い点も浮かび上がる。それが自分たちの現在地を示すポイントだった。

三人はこれを頼りに、やがてエレベーターを発見し、それに乗り込んだ。

彼らをつける、怪物の存在に気づかずに。

白銀たちと合流した俺たちは、奪われた武器を回収すると共に唯たちを探すために行動していた。

武器を回収する澁、白銀、霧明、彰。

唯たちを探す俺、黎兒、翔、れお。

現在俺たちはB12Fの通路を歩いていた。それにしても、どんだけ深いんだこのビル。

流石テロリストの基地。迷路状になってんな……。

「それにしても、よくPDAのメール機能で気をそらす作戦なんて思いついたな」

「まあ、こういう機械にはなれてっからな」

でも、半径2メートル範囲内の兵士のPDAにメール送ったから、もしかしたらあいつら以外のPDAにも送られてるかもしれねえんだよな……。

だけど未だに騒ぎは起きてないから、運よくあいつらのPDAだけにメールが送信されたんだろう。よかった……。

と、PDAを適当に弄っていると、メールの受信フォルダの画面が現れ、色んなメールが見る事が出来た。

PDAの使い方とか、兵士たちの暇潰しメールとかばかりだったが、中には侵入者をつたえるメールもあった。

「……今から4時間前と5時間前……か。俺たち以外にも、誰かいるって事か」

このビルに侵入している第3者が。

雅たちは俺たちとほぼ同時に進入してきたって言うし、あいつらじやあないだろう。

まあ、どっちにしろそいつらと戦う事がないように祈るか。

「あ、うう……」

俺は立ち止まり、横にある部屋のドアを見る。

PDAの地図を見ると、この部屋はこのフロアの中で一番広く、何かある事は間違いないだろう。

もしかしたらこの中に……？

可能性はある。

「俺も同感だな」

黎兒も言うのと、二人も頷く。

全員一致と言う事で、横にある認証装置にPDAを読み込ませて、ドアを開ける。

どうやら何かの実験室の様な所で、液体の入ったカプセルがたくさん並んでいた。

「なんだこの部屋……？」

「さあ……怪物でも作ってるんじゃないのか？」

「その通り」

突如聞こえた声に俺たちは一斉に身構える。

「どこだ!？」

「……だよ」

部屋の正面からコツコツと地面を歩く音がする。暗くてよく見えなかったが、やがて俺たちの前にその声の主の姿が現れる。

「……お前が、怪物を作ってたのか？」

良く見ると、俺たちと同年代の青年だった。

だが白衣を着て、その姿はまるでどこぞの科学者を連想させる様な姿だ。

「まあ、テロリストの仲間じゃないけど……仲間って言えば仲間ですよ」

「じゃあ、フリーデンの？」

「……ええ、まあ。研究員やってます」

なるほどな。

……で、俺らをどうするんだ。

捕まえたきや捕まえりゃあいいけど、この人数を捕まえられるか？

「いや、いくらなんでもそこまで無謀な事はしませんよ」

「じゃあ……ほっとくのか？」

「まさか。でも、正直言えば、あんまテロリスト《あの人》たち、嫌いなんですけどね」

「それは、フリーデン全体の評価なのか？」

「俺個人の意思ですよ。周りは気持ち悪いぐらい、テロリスト《あの人》たちに尻尾振って餌貰ってます」

「まあ、主人が求めてるもん、持ってきてるからな」

なんとなく、こいつは敵じゃない。

そう思い、俺は銃を下げていた。いつ襲ってくるか、分からないのに。
もしかしたら懐に隠し持つてるかもしれないのに。

「……名前は？」

翔は銃を降ろしていなかった。

まあ、これが本当の対応なんだろうな。

「三浦仁です。……ああ、そっか。あなたたちが例の侵入者だったんですね」

「って言うこと？」

「俺、さっきここに来たばっかなんで。侵入者の事は、ここの人に聞いただけなんです」

なるほどねえ……。

と、俺は調子にのってこんな事を。

「なあ、俺たちの武器、どこにあるか知らないか？」

「ああ、それなら」

その直後。

ペチャリ、と言う足音がした。

はっきり言おう、これは人間の足音じゃない。分かっていると思うけど。

つまり怪物の。だが、未だにここまで来てこんな足音のする怪物を俺は知らない。

「なんだ……？」

「まさか……あいつが……」

仁はかなり動揺していた。

この音の主がどんな奴か知っているんだろう。と、俺たちに少し歩み寄ってくる。

そして小声で、

「ここじゃあどう考えても不利だ。とりあえず、ここ奥にある戦闘実験室に行きましょう」

「……分かった」

仁の誘導で、なんとか気づかれずに姿の見えない怪物と対面することなく、広い実験戦闘室に到着した。

ここは俺たちが捕まえる前にいたところよりもっと大きく、野球場ぐらいの大きさだ。

天井も高く、まるでタワーをイメージさせる部屋だった。

だがところどころに弾除けの壁があったり、段差があったり、本当

に戦闘するための場所だった。

「……で、どうする?」

「ここから一応、廊下に戻る事は出来る。

……けどまあ、少し時間がかかる」

「時間がかかるって……?」

「扉を開けるのにかかる時間。パスワード認証した後に、5分ぐらいの時間が必要なんだ」

「めんどろなシステムを」

と、直後。

れおが喋ろうとした瞬間、実験室のドアが付き破られる音がした。ふり返ると、そこにはカエル型でも犬でもない、まるでトカゲの様な形の怪物がいた。

「……嘘だろ」

しかも、でかい。

「そりゃあ、あんなところじゃ無理な訳だ」

全員が銃を構える。

その間に、仁が近くの鉄でできた階段を上る。

「俺が扉を開けてきます!その扉から、こここのボスがいる部屋に通じますから!」

「俺たちは時間稼ぐんだな！？分かります！」

とは言ったものの、銃弾も限りある。

正直、今の装備で心もとない。

「俺たちの武器、どこにあるか知らないか！？」

「多分、武器庫に保管してあると思います！」

おっしゃあ！そう言いながら、PDAを弄って、通話システムを起動。

やがて、澪に持たせていたPDAと繋がる。

「澪か！？俺らの武器は」

『大丈夫！もう見つけた！』

「ホントか！？じゃあすぐに」

「遼祐！！！」

黎兒の叫びで、俺は助かったんだと思う。

トカゲが飛びかかって来て、なんとか避けるが、トカゲが着陸したコンクリートの床が大きな音をたてて亀裂を作った。

これの下敷きになったら、せんべいの完成だな。

「今すぐ、戦闘実験室に来い！出来るだけ早くな！！！」

『分かった！』

通話を終了させ、すぐに戦闘態勢。

トカゲがこつちを向いた瞬間、M4カービンを3点バースト射撃。弾の節約のためだが、そもそも元々の体力が高いのか、ピクリともしない。

「くそ、元々の武器があれば……」

「いや、正直これは元の武器でも……」

翔が嘆き、黎兒がそれを否定する。

残念ながら、これは黎兒の言う通りなのかもしれない。

見た限り、元々の戦闘能力が高いので、ゴリ押しじゃあ無理だと思う。

PDAの通話システムで、仁に繋ぎながら、俺たちは仁がのぼった階段とは反対側の通路へと駆ける。

「仁か！？扉は！？」

『まだパスワード解析中です！俺のPDAで解析させてるんですけど……！』

だろうな、もうちょっと時間稼ぎが必要か……。

右に曲がって階段を駆け上がり、時々後ろを向きながら銃を撃って走る。その繰り返し。

一向にトカゲの体力は減らないし、走るスピードを変える様子もない。

『……すいません、俺のせいです』

「はあ!？」

『俺が、俺たちがあんなものを作ったから……。だから嫌だったんだ、あんな実験……。!』

「今んな事言っても仕方ないだろ……。!」

『分かっています!俺は俺で出来る事をやります』

通話終了。

PDAをポケットにしまい、走り続ける。

……。あいつ、フリーデンも嫌いなのか……。?

三浦仁はフリーデンの新人研究員だった。

配属された当初から、周りから既に仁の知識などを評価されていた。フリーデンは元々、それなりに有名な薬品企業だった。

遼祐たちが今いる巨大ビルは、元々このフリーデンの物であった。

だが、世間が知るフリーデンは、薬品企業と言う表の顔。

裏では密かに、軍事転用する新型生物兵器を開発していた。

だがむやみに人を襲う、そんな生物を作っていた訳ではなく本当に普通の姿をした軍で使用する、簡単に言えば『改造された動物』モルモットアニメタルを開発していた。

だが、それをとあるテロリスト　つまり今回の騒動の黒幕たちがその技術を悪用しようと考え、ビルを占拠、フリーデンを支配下に

おいた。

『モルモットアニマル』を凶悪な『凶暴な生物兵器』クリーチャーへと変化させ、世界をこの様に変えた。

「本気ですか局長！？バカな事はやめてください！」

当然、正常な思考の持ち主であった仁は当時最高責任者であった、研究局長に異議を申しした。

だが、これはフリーデンにとっても苦渋の決断。

社長と副社長、その他上層部全てがテロリストの犠牲になった。

自分たちが生き抜くためにはこうするしかない、そう伝えられ、仁は落胆した。

だが仁は黙ってテロリストの言う通り、日夜、大人しくクリーチャー開発の研究をしていた。

自分には、発言力すらない。

それを静かに悟り、テロリストではなく、フリーデンの命令に大人しく従っていた。

でも、それは無意味に彼らの操り人形になるわけではなかった。

静かに、仁は願っていた。

いつか世界を変えてくれる、救世主が現れる事を信じて。

俺たちは依然として、走り続けていた。

だが体力的にも、そろそろ限界が来ていた。

ホールに様な少し広い部屋に来て、少しだけ走りをやめて、息を整えていた。

トカゲとは距離を取っていたが、ここにくるのは時間の問題だろう。

「……………どうする？ 遼祐」

「どうするもこうするも……………」

銃は全て弾切れ。PDAも役に立つわけがない。

溲たちはいつ来るか分からない。扉も、まだいつ開くか分からない。完全に積んでしまった。

「だけど……………ここで死ぬわけにもいかねえよ」

とにかく、何か方法を見つけろ。

だが、その判断もすぐに無駄となった。

翔が声を上げ、広間の入口を見ると、トカゲの姿を確認してしまっ

た。
「……………嘘だろ」

流石に、こればかりはどうしようもできない。

俺たちは、死を覚悟した。

トカゲがこちらへ向かって直進してくる。

全員、その場から動けなかった。

そりゃそうだ。なんせ……………死んだと思ったから。

「……………ごめん、唯」

結局口だけ。

……分かってる。ずっとお前という。

無理だったじゃねえか。結局。
またあいつに、二回も……同じ悲しみを味あわせないといけないのか。

「冗談じゃねえ……冗談じゃねえよっ……！くそつたれが……！！！」

「だったら最後まで戦え！！！」

「そつだー！！！」

突如、二方向から声が聞こえた。

片方は聞きおぼえがある。もう片方は分からないが。

だがそのもう片方から声が聞こえた瞬間、巨大なトカゲの背中にかかと落としを食らわせる青年の姿があった。

そして聞き覚えのある声が聞こえた方から、火の玉とマシンガン、魔力弾の嵐が。

それらすべてがトカゲに直撃し、煙で見えなくなる。

「……………英樹さん！？凌！？」

見ると、屋上へ向かったチームがみんないた。でも、なんで！？どうやってここが！？

「三浦仁って奴から聞いた。PDAを通してな」

凌がPDAをちらつかせながら、そう言う。

……………そう言う事が。

そして、男三人が俺らに近づいてくる。

「あなたたちは……………？」

「高井翔一。こっちは加藤渡と金沢彰」

「俺たちは、たまたまエレベーターでこの階まで来てて、銃声があったからこの部屋まで来たんだ」

彰と言う男がそう言うと、なるほどなと納得する。そして、またもう片方から声が聞こえた。

「遼祐〜!!」

「澪か!？」

澪達がこっちに走ってくる。

その手には、俺たちの武器を持って。

「まったく、走り回るから探すのに苦労したぞ」

「ごめんごめん」

「日暮さん、これ」

と、久しぶりに握る銀色の拳銃のグリップを握る。

……久しぶり、相棒。

銃をスライドさせて、トカゲの方に顔を向ける。

トカゲは少し意識を失っていただけで、意識を取り戻すところを睨んでいた。

そしてどこから湧いて出たのか、周りには銃を持った兵士たちが多数。

「……やべえな、この数」

「……だけど、もっと危ないのもいるぜ?」

トカゲの足元から、誰かが現れる。

真黒なロングコートを着たその男は、見た限りでは俺たちと同年代の青年だ。

だが、そこから溢れるオーラは危険な雰囲気漂わせていた。

「……なんだ、お前？」

「聞き覚えないか？この声」

確か、この声は……。

あのスピーカーの声の奴か！

「正解。……井上隆裕だ」

「てめえ！唯たちはどこだ！？」

「……さあ、どこだろうな」

「単刀直入に言わせてもらおう。……ボスを出せ」

「悪いな、ボスはアンタ達に付き合ってもらえるほど暇じゃなくてね」
腰のホルダーから赤色の拳銃を取りだすと、それを俺たちに向かって構える。

「さあ、始めようぜ。大戦争って奴を。お前らが勝てば唯たちの居場所を教えてやる。……お前らが負けたら、分かってるな？」

「……死ねと」

「……よく分かってんじゃないかねえかああああ！！」

そう言った瞬間、トカゲが突進してくる。
俺たち全員は、同時に身構えた。

お知らせ

この度、本作の物語の統制が取れなくなり、続行が困難となりました。まいりました。

そのため、やむを得ず公開を中止、打ち切りとさせていただきます。

再構成版『けいおん！ LOVE！LOVE！LIVE！EXシナ
リオ-BULLET OF CRISIS-ANOTHER ED
ITION』を9月1日より公開いたします。

なお、各先生方に投稿していただいたキャラにつきましては全員続投という形を取らせていただくとお思います。

問題があるようでしたら、作者にご連絡をお願いします。

皆さまには多大な迷惑をおかけした事を、お詫び申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0045o/>

けいおん! LOVE!LOVE!LIVE!EXシナリオ-BULLET OF CRISIS-

2011年9月11日02時43分発行